

【シンポジウム記録】

(2006年度 スポーツ政策シンポジウム 2006年12月10日(日)開催)

「ラグビーワールドカップ招致を考える

—国際スポーツイベントと地域振興—

横山 勝彦・真山 達志

〈横山〉ただいまから「2006年度スポーツ政策シンポジウム」を開会致します。私は、本日のコーディネーターを務めます同志社大学の横山勝彦と申します。よろしくお願ひ致します。開会に先立ちまして総合政策科学研究科長の新川達郎先生よりご挨拶がございます。

〈新川〉皆さん、こんにちは。本日は同志社大学大学院総合政策科学研究科及び朝日新聞社共催によりますスポーツ政策シンポジウムにお集まりいただきまして本当にありがとうございます。合わせて日本ラグビーフットボール協会会長、元総理森喜朗先生にもご臨席賜り、ご講演をいただくこと、また本日、登壇いただきます平尾誠二さん、林敏之さん、大八木淳史さん、そして私どものメンバー真山達志、横山勝彦両先生を含めまして改めて御礼を申し上げます。このスポーツ政策シンポジウム、毎年この時期に開かせていただき、話題性もあって多くの方にご注目をいただいております。今日はたくさんの方にお出でをいただき本当にありがたく存じます。私どもは日本社会の中にこれからスポーツ文化が根づいていくように、それを地域から組み立てていくという考えでスポーツ政策シンポジウムをやってまいりました。しかし、もう一方では今日のテーマでございますように、ラグビーワールドカップのような世界的なイベントが行われること、そしてそれがまた一方では社会の中にスポーツを定着させるすそ野を広げていく大きな役割を果たす、そんなふうにご覧いただきまして今回の企画をさせていただきました。これからの豊かな社会を考えていく時、スポーツ文化が定着して多くの方がスポーツに親しんでいく、そういう社会がこの日本でも実現されていかなければならないと思っております。

多くの人材をこの同志社からも輩出していきたいと思っております。これからのスポーツ文化を發展させ、社会に定着していく機会として、今日のスポーツ政策シンポジウムを位置づけていただければ幸いです。存分にお楽しみをいただき、このシンポジウムから多くのことをくみ取っていただければと願っております。本日は本当にありがとうございました。

〈横山〉それでは、次に、私の方から趣旨の説明と登壇いただく先生方をご紹介させていただきます。先頃、サッカーワールドカップがありました。今年はバスケットボール、バレーボール、その前は柔道、来年は世界陸上大阪大会ということで、スポーツのビッグイベントが日本で開催されたり、されようとしているわけです。森先生も関係されておられるオリンピック誘致ということも昨今の新聞を賑わしており、皆さんの記憶にも新しいかと思ひます。スポーツは夢とか希望を我々に与えてくれるもの、活力を与えてくれる歓迎すべきムードだということですが、一面では、この財政難に何を言っているのだとか、盛り上げるためにメディアが過剰な演出をすることから嫌悪感を抱く人、あるいは関係者だけで盛り上がっているのではないかと冷めた見方をされる向きもあるかと思ひます。そこで2015年、ワールドカップを招致しようというラグビーを題材に、今一度、我々が住んでいる生活空間である地域にスポーツイベントが何をもたらしてくれるかという原点に立って考えてみようというのが、このシンポジウムの狙ひであります。

ご多忙な中、ご迷惑なお願ひにもかかわらず、ご快諾いただきましてお見えいただきました森喜朗先生でございます。森先生はラグビー協会

会長、日本体育協会会長でもあられます。そういうお立場から「国際スポーツイベント招致の意義」についてご講演いただく予定でございます。

次にキーノートレクチャー1としてご登壇いただき、神戸製鋼ラグビー部ジェネラルマネジャーの平尾誠二さんです。平尾さんは元ジャパン監督というご経験も踏まえた上で、「なぜ日本でラグビーワールドカップなのか？」という原点に立ったテーマでお話していただきます。

キーノートレクチャー2としてお話しいただく、神鋼ヒューマンクリエイティブの林敏之さんです。林さんには13年もの間、ラグビー日本代表を務められたというご経験から、その経験を踏まえて「ラグビーワールドカップとは？」というテーマで熱き思いを皆さんにぶつけていただきます。

キーノートレクチャー3は、神戸製鋼ラグビー部アドバイザーの大八木淳史さんです。今、大学院で「スポーツと青少年育成」というテーマに取り組んでおられます。「ラグビーがワールドカップに波及効果はあるのか？」というテーマで、地域や青少年に与える影響ということについてお話していただきます。

キーノートレクチャー4は、同志社大学大学院総合政策科学研究科教授の真山達志先生です。真山先生からは、3人からのラグビーワールドカップや、スポーツに対する夢・希望が地域形成、地域の活性化になるかということで、ご専門の地方自治、行政学のお立場からお話していただきます。「地域社会形成にスポーツは有効なのか？」というテーマです。

講演の後、キーノートレクチャー、そしてクロストーク、最後に皆さんとの質疑応答と進めてまいりたいと思います。

実り多いシンポジウムとなりますよう、皆さんのご協力、よろしく願います。

それでは森先生、よろしくお願い致します。

国際スポーツイベント招致の意義

森喜朗（衆議院議員〔元内閣総理大臣〕、
日本ラグビーフットボール協会会長、
日本体育協会会長）

こんにちは。森喜朗です。今日は、国会議員

の立場を離れまして、ラグビー協会会長として、2011年ワールドカップ招致に一敗地にまみれまして、その反省も含めて2015年に挑戦を新たにするわけですが、多くの問題がたくさんありますので、その反省も含めながら少しお話をさせていただきます。

その前に、同志社大学に招かれたことは誠に光栄なことであります。高等学校は私は金沢でございました。生まれは小松市のすぐ隣にあります、今は合併でなくなりましたが根上という町なんです。大変有名な町です。ほんとなんですよ。それは総理大臣が出たからではなく、松井の生まれた町なんです。私の家から500～600メートル先のところにおいて、小学校の後輩にもあたるわけです。根上町の町長が実は私の父親なんです。昭和8年、早稲田でラグビーをやっておりました。昭和12年、支那事変が勃発しました時には親父は戦地についておりました。私は盧橋溝事件の1週間後7月14日に生まれたわけです。親父は長男をなんとかかつくっておきたいと、あの頃の若者は日本のために死ぬのだと思っていましたから、種付けだけちゃんとして行ったんだと思っております。私の幼年期、下駄箱の上に革のグローブがありました。当時は珍しかったと思います。もう一つは革でくしゃくしゃになったものがあって、これはなんだろうと思って聞いたらラグビーのボールだ、と。ラグビーってなんだということは全然知らなかった。親父が戦争から帰ってからラグビーというのはどういうものか、わかってきたわけですけど。その頃からラグビーに縁がありましてね。小学校5年生の時、昭和23年、当時は未だ食糧事情が悪くて、今は大学は菅平とか夕張とかいいところで合宿していますけどね、当時は食べるものがまずなかったから、私の田舎に早稲田のラグビー部が私の親父を慕ってきたわけです。1ヵ月くらいいたでしょうか。50～60人くらいの若者たちが、若者といってもばらばらでしたね、戦争に行っていた連中でしたから。その連中が私の小学校でラグビーをするのを見ておってね、だんだん憧れたんですね。俺もやりたいな、と。そのうちに金沢で紅白試合、オープンゲームで早慶戦がありまして、それを見たらますますラグビーをやりたくなりました。それが私がラグビーに入った動機でもあるわけです。

結構、高等学校の時はうまかったんですよ。今、大八木さんから「何のポジションされていました？」と聞かれるから、「俺、10番でスタンドオフだった」、「ほんとですか？」って言うんですけど（笑い）。大体、外国の首脳たちに会いますと「お前は何番だった？」と聞かれるんですけど、私が「ナンバー 10だ」と言うと「ふん」という顔しますけどね（笑い）。その頃はスリムでね、平尾さんほどくらいだったかもしれない（笑い）。特に身体が柔らかくてフェイントモーションなんて得意で、ちゃんと石川県では最もトライをするスタンドオフでもあったわけです。卒業は昭和31年です。その頃は大学から「ぜひ受けなさい」と勧誘を受けまして、同志社大学からも来たんですよ。ほおっと言うけど、ほんとですよ（笑い）。だけど皆から言われたんです、「同やんと、立教はやめた方がええ」（笑い）。「なんで？」と言うと「横文字がうるさいよ」なんて言われてましてね。ここまで来ましたけどね、来て、結局、試験を受けずに帰ったんですよ。それともう一つは先輩がいなかった。先輩が呼んでくれ、先輩がいろいろ世話をしてくれると受験がしやすいですけど。憧れの同志社大学に入れませんが、こうして半世紀たって同志社大学の大学院で講義ができるという、これは勉強したってそんなことはできなかったと思うので、ラグビーやったからできるわけですからね、こんな名誉なことはございません。1時間ほどほしいんですけどね、30分ということですから（笑い）。私は今日は先の約束で福井県敦賀に行かないといけませんので。

今日のテーマに合致するかどうかわかりませんが、いくつかの話をします。専門家の皆さんに繕っていただいて、それぞれのお考えを示していただければと思います。11月4日、日本ラグビー協会は創立80周年の式典を行いました。その席上で皆さんのご意向もございまして、引き続き「2015年のワールドカップ招致を日本協会として宣言をしろ」というのが皆さんの意見でございました。私は2011年の招致に失敗した責任者でありますのでね、「私がやるのが、いいのかな」ということが一つあったのと、もう一つは「ほんとに強いのかね」ということになるんですよ、日本のラグビーは。これIRB（International Rugby Board）、国際ラグビー連盟の皆さんとディスカッションをやるとね、

皆、日本を別にいじめたいと思っているわけじゃない。「日本でやって入るの？人が」。必ずこうなるんですね。それは日本が相手にしているどこかの国との試合には来るでしょう。しかし約2カ月にわたって全国各地でやらなきゃならんわけです。その時に第三国同士の試合がある。それに「どれだけ日本の人たちが来てくれるのかね」ということが、IRBでは一番心配をしていたところでありますし、もう一つは「日本が決勝リーグに残れなかったら、それで皆、ダウンしちゃうんじゃないか。日本は最後の8強に残るとか決勝リーグに入れれば日本人のラグビーファンも集まるだろうけど、その力があるのかどうかね」ということです。そういうことをやっている矢先に「100何十対0で負けた」とか「90何対0で負けた」というニュースばかり出てくるとね、「大丈夫、日本は？」と、こう言われましてね。その点がどうなのかな、と。来年のフランスでのワールドカップがあるわけですから、そこで日本の勝敗の数とはかく、世界の国と、ラグビー先進国という国々とどこまで戦えるだろうかという、そのへんの様子を見てから正式に表明をした方がいいのかという思いで、私はいたんです。しかし皆さんのお気持ちは「80周年記念にぜひやれ」ということとございまして、一応名乗りを上げ、我が協会の河野一郎さんという理事は筑波大学の先生ですが、たまたま今回、東京オリンピック招致の事務総長に就任されましたので、しょっちゅう世界に出ていかれる。そんなことでそれぞれの国のラグビー関係者とも日本招致の話し合いを、ある程度、事前にできるということもございまして今回の招致を決めたわけです。

招致をする、ワールドカップを開くということには目的が二つあると思っています。一つは「我が国のラグビーが全体的に向上する」ということ。これは技術的にもそうですし、人気の面でもそうだと思います。なぜかと言うと、意外なんです、日本のラグビー人口は約13万人です。これは世界でも1番目か2番目になるんですよ。これだけラグビー人口の多い国はないんですよ。これはイングランドやウェールズなどどこから見てもそうなんです、フランスにしても。ラグビーチームは大学はもちろん、トップリーグから子どもたちに至るまで公式に協会で認めているラグビーチーム数だけでも世

界で3番目に多いんです。ある意味では日本はラグビー王国なんですね。しかも協会が80周年ですし、ラグビーを日本に取り入れてからすでに110年たっていますから大変なラグビーの伝統国だというふうに申し上げてもいいわけです。

ただもう一つは、「もっと強くなければならぬ」ということですね。サッカーだと3対1、4対1でも、そんなに差が開いたとは思わないんですが、ラグビーはこれに7掛けをしますから4×7、28対5なんていくと「えらい、負けたのやな」と、こうなるんですね。これはラグビーが得点がトライで5点、ゴールして7点となりますから、だんだん広がっていくわけですね。だから80対30とか、95対45というスコアが出ると、えらい、負けたような感じがしますが、中身はそうでもないんですね。そういうこともあって、しかしそれは単なる言い逃れにすぎないわけで、なんとしても日本のラグビーを強くするという、ラグビー全体の存在感を向上させていくことが招致の理由の最大のものだろうと思うんです。

さあ、ここですが、大八木さんや林さん、私なども体格的にはいいんですけども、平尾さんは体格的にラグビーの身体ではなく、知恵と勘でやっておられる（笑い）。知恵と勘だけで勝てるのかどうか、ここがラグビーの面白みなんですね。身体の大きいもの同士がぶつかっていく。トンガの連中とかフィジーもそうですが、経済的に必ずしも恵まれた国ではないが、ラグビーだけは強いんですね。石川県の高校のお父さん、お母さんたちと会ったら、私に文句を言うんですよ。石川県に日本航空学園の第二高校が進出した。なぜ石川県に行ったか。能登空港という飛行場ができて飛行場が空いたきりなんで、そこで航空学園は山梨にある滑走路はたいしたものではないので、能登空港を使わせてもらいたいということで第二高校を持っていったんですよ。もう一つの理由は山梨では日川高校が強くて、なかなか日本航空学院は花園に出られない。野球は甲子園に出ているんですね。ラグビーはどうしても出られないので、石川に行けば石川は弱いから出られるだろうという、そのへんの算段もあって、ついに航空学園は去年から花園入りで、今年もまた花園に出ますが、今年はそのすごく強いんです。なぜ強いのか。トンガの留

学生が2、3人入っているわけなんです。そうするとね、まだ心身ともに発達していない18歳、17歳の子どもたちにとってトンガの留学生はほんでもなく大きいでしょう。どうしても勝てない。留学生は2人出せるのですね。それは大きいですよ。私が見てもびっくりするくらいです。大八木さんが幼稚園児と戦っている感じですよ。お母さんたちから「あれ、不公平ですよ。あんな大きな人が入ったら困るんです」、「そうは言いなさんな。これからの国際化社会にはそういう国境というのはなくなるのだから、そんなことを言っていちゃだめだよ」と言って慰めてはいるものの、何か可哀相な気分もするんですね。去年だったと思いますが、大学選手権で優勝した早稲田とトヨタがやった、ものすごく壮絶な戦い。なんとか大学は社会人に勝ちたいという思いがあって、20年か前に東芝を倒して以来ですよ。ところがトヨタはその時になると必ず外国人を入れるんですね。私は「おかしいぞ。早稲田に外国人いないんだから、トヨタは兄貴なんだから外国人を外せよ」と、こう言うんですけど、トヨタは「新幹線1両に皆、のっけて名古屋から来るんだから負けるわけにいかないんだよ」と。そういう体力差というもの、むしろ体格差でしょうね。これをこれからどうクリアしていくか。大八木さん、平尾さん、林さんのテーマですから、後でやってください、やれるのかどうか。

僕は相撲の世界で言うんです。曙が出たり、高見山の頃ですね。なかなか勝てない、身体で。今、頑張っている安馬、舞ノ海、時々、奇襲でバーンと、でっかいのを引っ繰り返しますね。15日間、その手は食わないですね。まあ2つ、3つはパンと飛び上がったたり、やってたでしょう。15日間全部やれるわけではない。相手も見えますから。あのクラスの身体の軽量の力士は大体、うまくいって8勝7敗、うまくいって9勝6敗、7勝8敗と下がっていく。下の方に来るとまた上がっていく。なかなか三役力士にならない、軽量級は。しかし一試合くらい勝てるという。柔道や相撲はそれでいけると思うんですね。しかしラグビーは15日間、走り回ってないといけない感じですから、奇手を使ったり、奇襲戦法を使ってやれるのも、せいぜい10分、15分はやれるが、40分ハーフ、ずっとそれでやれるかという、日本の選手の体力差、体格差と

というのは絶対難しい問題を抱えているような気がするんです。

最近、オーストラリアとニュージーランドとかが心配してくれてね、選手の総重量制、「15人のトータル体重をイーブンにしよう」。これはほんとなんですよ。そういう話はあるんです、どういうふうにできるかわかりませんが。そうしなかったら日本に芽はないという日本に対する好意的な方たちのお考えなので、まあ、なんとなく恥ずかしい思いもするけれども、「悪くはねえな」という感じは正直言ってするんですね（笑い）。こういうことが「いやいや、それは」となれば、また3方のテーマとして、ぜひ考えてもらいたいと思うんです。これは日本の招致を進める一つの理由です。

もう一つの理由は格好よく言いますよ、「ラグビーのグローバル化」なんです。ラグビーを世界のスポーツにしなきゃいけないということです。「ラグビーは世界のスポーツじゃないのかね」と言うと、そうではないでしょう。ヨーロッパからオセアニアと日本くらいで、最近ではアメリカもロシアも韓国も出てきていますね。中南米で言えばアルゼンチンなどもあります。しかしほんとに世界全体のスポーツなのかねと言うと、何かヨーロッパで旧大英帝国の領域の中に抱えられている、これはラグビーの伝統から言っても、そういう傾向が非常に強いんですね。これをどうクリアして、ほんとに世界のスポーツにするのか。世界のスポーツにするために日本はその先兵になるということだと思えます。これは世界の多くの人たちも「ヨーロッパから外して、豪州とかニュージーランドから外して新しい地で、新しい国でラグビーのワールドカップをやるなら日本だね」というのは、大方の皆さんのお気持ちで、これは先輩たちが作りあげてくれた日本ラグビーの歴史の重さということが言えるのではないかと考えています。

今日からアジアの7人制のラグビーがあります。今日はリーグ戦で予選から始まるわけです。おそらくそれでもざっと12カ国入っています。インドもカタールもタイも。中国、台北、香港、韓国、日本、その顔ぶれでいけば、まずよほどのことがない限り日本は勝つだろう、決勝リーグに行くだろうと思っておりますけども、そういうアジア全体に対して兄貴格として、アジアの国々の技術を向上させ、そういう国々に対し

ても日本も責任を持って、ラグビーのリーダー的なカントリーになっていくこと、これも大事な日本の役割で、それが世界から評価されていくことになるのだらうと思います。

したがって今、申し上げた2つの点で、ワールドカップを、ぜひ日本に招致するということは、これは決して不可能なことでもないし、またラグビーというものを国際的な大きなイベントスポーツとしていくために、日本がまず先兵になって頑張らなければならないという意義があるということ、ご理解をいただければと思うんです。

そこで今度は反省もしなければなりません。2011年は残念ながら日本は破れました。公式には何票負けたか出されておられませんけれども、実は2票負けたんです。11対9だったんです。日本やフランスやイタリーやアルゼンチンは1票しか投票権はないんです。ところがイングランド、オーストラリア、ニュージーランドは2票持っているんです。おかしいでしょう、民主主義の国で。国連だってそんなことはない。IRBの会長に言ったんですよ。「大きなロシアや中国だって1票で、小さな、小さな日本だって1票で、そんなおかしなルールがこの世の中で平気で通っているのはおかしい」、と。しかもイギリスはイングランドだけではないんです。スコットランド、ウェールズとあるんです。皆、2票ずつ持っている。仲は悪いけどアイルランドも入る。アイルランドもラグビーの試合の時は大変ですけど、昔は500年ほどイギリスに制覇されていましてから今でも歴史的には面白くないんでしょうが、いざ大英帝国の問題になると皆、賛成する。イギリスの4つの地域だけで、スコットランド、イングランド、ウェールズ、アイルランドを入ると8票になる。そうでしょ、合わないんです、なんぼ頑張っても。こういう矛盾をどうするかということで、我々は「日本のラグビーは世界をグローバル化させるんだ」という大きな目標で一生懸命ネゴシエーションをやっていたわけです。ところがこれはどうしたことなのか、いつもは理事が20人くらいですから挙手で決めるんですよ、「賛成の方」と。去年だけ投票なんですよ。つまり日本にいいことを言ってきているから、「いや、日本です、ね、今度は」、と（笑い）。皆、言ってくれているんですよ。「日本、と手を上げたいけど、

周りにまずいな」という、そういうこともあったんでしょかね。日本に何の断りもなく、理事たちだけで勝手に決めて、日本の理事の発言力が弱かった点もあり、しかし、いつもは拳手で決めるものを、去年だけは投票箱に入れた。しかも数字を見せないという、まさに非民主的独裁国家でもやりそうなことを彼らはやったわけです。最初、3つ名前が出ておりましたが、南アが4票しかなくて降りたわけです。残った2つの国でやったわけです。その結果が、予想ですが、2票の差で負けた。イングランドも「日本」だったと僕は信じています。イングランドの会長と話をして。フランスもいいことを言っていたんですが、どうも2票を1票ずつ分けたという話です（笑い）。こういうのを分析していきますと、「ちょっと惜しかったな」と。僕らはウェールズをマークしていたんですけど、これはこれから今日のテーマに合致するものだなと思えますが、ウェールズを何とか口説こうと思ひまして一生懸命口説いたんですが、最終的には負けました。金の力で負けました。なんでニュージーランドと日本で金の差があるのかと、皆、不思議に思うでしょ。この謎解きはその後でします。興味を持って聞いてもらいたいですね。

そんなこともございまして我が国は残念ながら破れたわけですが、もう一つ、これは我々の政治の分野にかかわることでありまして、「国家保障」という問題が最近出てきたんです。これはラグビーだけじゃないんです。スポーツイベントを国際大会をその国でやりますと「国が保障をしろ」ということなんです。つまりIRB国際ラグビー連盟にいくばくかの金をちゃんと入れてくださいよと言う。かなりのもんですよ。言わない方がいいかな。ざっと100億円です。ざっと100億円近いお金を日本の協会がIRB国際連盟に対して、ちゃんと入れますよと約束しないとイケない。それが入れられなかったら国が面倒みるんですね、それが「国家保障」なんです。国が国の税金でちゃんと穴埋めします、と。これは日本の政府は聞きませんね。ここがね、ポイントなんです。他の国は全部、国家保障をやるんです。日本はやらないんです。やれないんですね。役人のカチカチ頭もあるかもしれませんが、まだ日本の政治家全体が「スポーツに税金を出しているのかね」ということに、与野党

ともども、いろんな意見があると思います。ここは難しい。

私には体育協会会長という立場もございます。ワールドカップラグビーの3、4ヵ月前にモントリオールで世界水泳大会を決定するイベントがあったんです。日本は横浜市が手を挙げた。イタリアはローマ市が挙げた。ローマと横浜の最後の争いになったんです。我が方は国会もあってスポーツ担当の文部科学大臣が出られるわけでもない。総理も出られない。私が体育協会会長も兼ねて水泳連盟から出てほしいと言われて出たんです。ところがイタリアは現職のスポーツ担当大臣が入ってきます。そこで演説する。担当大臣は「我が国政府の責任において」とやるわけでしょ。皆、「ほお」と思うね。それでは「日本のスピーカー、森」と言われても、私は「日本国政府においてやる」とは言いきれないですね、責任が伴いますから。「我が国は国のお金は今、出せないが、それくらいのお金はちゃんと用意できます」。実は用意してあったんです、あるテレビ会社が出す、と。それは40億円ですよ。それを言ったけれども、だめなんですね。皆の気持ちは国が出す方に傾いちゃう。たった1票差でローマに横浜は負けたんです。

時を同じくして、その直後にロンドンの2012年オリンピックが決まりましたね。あれも最後の決定的なところで何があったか。誰もがパリだと思っていました。パリ、モスクワ、ニューヨーク。大都市全部が出て、最後にロンドンが取ったのは、投票の直前にブレア首相が来て大演説したじゃないですか。これで負けちゃったんですね。イギリスの首相が来たんですから。「首相がだめだったらエリザベス女王陛下を出すか」なんてまで、イギリスは言ってたと言うんですから（笑い）。国を上げて取ることにメリットがあると国が判断している。日本もそうなればメリットがあることはわかって、「国の税金を出しているんでしょかね」ということがある。日本の今の経済力や日本の民間の力を借りれば、仮に100億円程度を出せと言っても、それくらいの金は作れると思うんです。それはなぜか。電通はサッカー協会と契約しています。1年間、来年の契約をしたのを見ていると、なんと2,000億円ですよ。サッカー協会は意気軒昂ですから、今、2,000億円の金で契約を

して電通はそれだけのお金を出しても商売になる、と。ラグビーなんか年間電通との契約は、恥ずかしいから言わないけど（笑い）。まだそれだけ認知度がないということです。

こういう国家保障という問題がある。去年10月、実に3回、当時、アイルランドのダブリンを行ったり来たりしました。その時に小泉総理にも会った。「すまん。何とかならないかな」と言いながらも、日本側のメッセージするビデオを作りかえして、小泉さんにもういっぺんやり直してもらったんです。小泉さん、いいことを言ってくれました。国が保障するような、しないような言い方でしたけどね（笑い）。でも残念ながら「国が保障する」という言葉がないということで、IRBの最高幹部たちは日本に旗揚げをしなかった。じゃ、「ニュージーランドがやれるの?」ということになってくるわけですよ。日本とニュージーランドの経済指数を比較したら比較にならないでしょう、言いにくいけど。グラウンドも競技場もそんなにないでしょう。7、8つも3～5万人が入れるハコを作らないといけない。ニュージーランドは2011年になる前のどこかで、ギブアップしてくるんじゃないかという気も、しないでもないが、その時、おこぼれ頂戴で日韓サッカーの共同開催のようなことになるのかもしれませんがね。そんな余計なことは考えない方がいいですけど（笑い）。

もっと面白いのは南アフリカですよ。「ODAもらっている国が、なんで100億円近い金を国家保障できるんだい?」と言いたいわけですよ。ところがそれだけ、国にとって、日本円で、100億円近いメリットが国家にはあると判断しているわけです。そこの判断力の問題です。日本は経済は豊かですから、貿易量も豊かですから、「ワールドカップのスポーツで金を稼がなくてもいいんだよ」という思いがあるんだろうと思います、根底の頭の中に。ニュージーランドにしても、そうした経済の面から、これからの途上国ですから、そういう国から見れば、いやいや、ラグビーのイベントを持ってくる、サッカーのイベントを持ってくる、その方のお金が入る。国にとっては最高のプラスになると、はっきり割り切っている国でもあるということです。電通の話をしましたけど、電通の事業の大きな柱の一つはスポーツイベントをやること

なんですよ。スポーツイベントをやれば企業の大きな収入になることは間違いないと見ておられるわけでありまして、「スポーツをお金儲けにする材料にしているのか」ということ、ここがラグビーのようなアマチュアリズムの非常に強い競技団体から見ると、昔の先輩たちは「お前らは、何をやっとなだ」と言ってお叱りをいただくような今の状況だということなんです。そこまで精神的に「あくまでも金儲けはやらないんだ」と言う、金儲けではないが「プロ化はしないんだ」ということをずっと言い続けていくことができるのか。しかし多くのラグビーファンが待望しているワールドカップを日本に招致して皆に喜んでもらえるということは、ラグビー協会としても、ラグビー協会のラグビーファンに対する責任でもあるということになれば、そのことに対しては躊躇してはいけないのではないかということも考えなければならぬと思うんです。

いろいろ申し上げましたけど、我々にとって昨年の「国家保障」の問題が最大の難関でもありました。私はこの勝利はウェールズだなど、ウェールズの2票をもらえれば我々は勝ると読んで一生懸命ウェールズを口説いてみました。そこでウェールズが出してきた話はね、「ウェールズの協会のスポンサーになってくれないか」ということでした。今日、新聞に面白いニュースが出ていまして新幹線の中で読みました。今日は朝日新聞のご協力をいただいて恐縮ですが、毎日新聞です（笑い）。毎日新聞の「余録」で、「今日から国内競技場で始まるサッカークラブ世界一決定戦、クラブワールドカップは」という記事です。今まではクラブチームの2つを選んだ「トヨタカップ」だったわけです。ずっとトヨタカップで来たのを、今度は「クラブワールドカップ」となったのだそうです。日本での初開催となった1981年2月、イベントに企業の名を被せる冠大会の先駆けとなったのはトヨタカップなんだそうです。FC東京のホームグラウンドは調布にあります「味の素スタジアム」なんです。味の素の金を競技場の運営以上に出させている。これと同じようなことが横浜にあります、先頃、すばらしいサッカーの決勝戦をやりました競技場です。あれは「日産スタジアム」。そういう「横浜総合国際競技場」の正式名称に「日産スタジアム」とつきますと、大会を主催

する国際サッカー連盟（FIFA）はホームページに「日産」の文字を一切書かない。日本のどこでやったかを書かない。なぜかと言うとFIFAはトヨタがメインスポンサーだから日産の名前は書かない。こういう不合理な問題が出てきたり、三洋電機が調子が悪いということで、これまで19年間やってきたのは「三洋オールスター」だったでしょ。これを降りた。来年からやらない。こういうふうにはスポンサーが降りちゃいますと大会そのものを運営することが難しくなってくることもあるので、すべて企業におぶさる行き方は正しいかどうかということもある。これも今後の研究のテーマにしておいてください。

そのような話が、今日の新聞を見ていて、あっと思っただけで「そうだ、忘れていたことを思い出した」と。ウェールズとやった時のことを。ウェールズのグラウンドはごらんになったでしょ。すごいですね。日本では考えられないようなスタジアムですよ。そのウェールズの球場を「レクサススタジアムにしてくれ」と言うんですよ。つまり世界に冠たるトヨタの「レクサススタジアムにしてくれ」、と。それを「ミスター森、あなたがやってくれたら考える」と言うんですよ（笑い）。これは大変な話ですが、これでやれるのなら自分の懐がいらなくなるから、トヨタの金だから（笑い）。私は3回往復したんですよ、10月中、トヨタに。金額は言えませんよ。なかなか会社としても10年間、毎年、これだけの金を出せ、と。それでまず電話でやってみたんですよ。張さんが「それは森さん、電話では返事できませんよ」ということになって、一旦、東京に帰って奥田会長とも話をした。奥田会長も「10年の契約はきついな」、と。「5年でどうだろう。金額はきついな、こうならないか」とか。いろいろあったけど、さすが奥田前経団連会長ですね。「森さん、あなたに任せるからやってみろよ」（笑い）。「あなた、取ったら後で考えるよ」となりましたが、税法上とかいろいろ難しい問題があるんだそうです。なんでもいからそこまで奥田さんの説明をもらったんだからと帰ってきて、かけあったんですけど、10年ということにこだわるんです。無理もないんでしょうね。冠の球場が変わっちゃいますとね。ですから僕は言ったんです。「心配するな、トヨタが折れなかったら次は日産にするから」（笑い）。「後は東芝もあれば、神戸製鋼、サントリー

もあるし心配しなくていいよ」と言って交渉したんです。大分いいところまで来たんですが、最後の夜、詰めた時、えらい向こうが冷たいんですね。よそよそしいんです。私の勘では「だめだな」と、諦めて、選挙やったらわかるんです、「こいつは入れてくれるか、入れてくれないか」（笑い）。なんか下を向いて、ぐじゅぐじゅ言いだしたから。なんだろうと思って調べたら、これは違反だと思うんだけどね。選挙ではあんなこと絶対やっちゃいかんよな。ニュージーランドのオールブラックスを呼ぶんですよ、その時期に。いつも来る季節とは違う時期に。必ずIRBの了承を得て2国間のテストマッチをやることになっている。それを早めて投票の前にやる。ニュージーランドのオールブラックスが来ると、あのウェールズの大球場があつという間に7、8万詰まる。それはどこもそうです、イングランドであれ、フランスであれ。ニュージーランドのオールブラックスは最高なんです。その上がりの金を全部、その国にあげますというやり方をするんです。ニュージーランド・オールブラックスは別にいらぬんですよ。痛くも痒くもない。いい試合をすればいい。それで入ってきた収入を、ギャラをウェールズに協会に寄付しましょう、と。あるいはイングランドの球場に寄付しましょう。これではね、レクサスも勝てないわね（笑い）。5年間の何億円、10年間の何億円よりも、目の前の4億。4億円に当然魅力はいきます。オールブラックスが行くとそれくらいの金になるんですから。結局それに残念ながら負けたというのが、2票差だったなと思っただけです（笑い）。

こういうスポンサー、冠、経済界の応援も得なければ、こうした大きなイベントはできないということになります。もう一つ大きな広告の媒体であります電通とか、今、スポーツイベントは電通主力ですが、博報堂とか皆さんのお力も借りなければならぬということにもなるんです。そういう「やらせ」的なものに、あまり頼りますと、本来のスポーツなのかどうなのかというような疑問がかなり出てくるんですね。私は、ラグビーだけでなく体育協会の会長ですから、いろんなスポーツイベントには行くんですよ。この間、フジテレビの女子バレーを見ていて「これ、スポーツかな？」と思いました。ゴムのボールをバンバンバンとやるやつね。

少なくとも相手国に対して全く敬意を払わないですね。試合前の国旗掲揚もなければ国歌の交換もない。日本とブラジル、日本とどこかがやっているわけですが、応援団は日本だけしか応援しないんですよ。一番前に若者がいて「ニッポン、バババン、ニッポン、バババン」とやるわけですよ、なんでもいから。バレーボールの役員に「あの人はなんなんですか。審判席の横にいて」「いや、テレビ会社の下請けのヤラセ係だ」と（笑い）。こういう人をおいては外国に対して失礼この上ないですよ。ああいうこと、バスケットを見ていても、そう。最近6チャンネル、関西では4チャンネルで世界大会をやりましたね。あの時も同じことをやっている。教育上から見ても相手国に対して礼を失する。これは視聴率を上げるために、ただ「ニッポン、ニッポン」とやる。

記者さんいるかな、時々、私が失言が多いもんだから（笑い）。ほんとの話をしないといかんから、ほんとの話をするんですよ。この間、世界バレーボール協会の総会が東京であったんです。なんで総会を東京でやるのかわからんですが、日本に来ると待遇がいいから来る。会長以下、来る。そして世界バレーボール連盟から功労者に対して勲章が出る。誰に出たと思いますか？誰がもらうんだろうと思った。会長はサントリーの立木さんです。誰に出したと思います、勲章を2つ。TBSとフジテレビですよ（笑い）。結局、テレビ会社が金を作って、それをバレーボール協会に入れる。世界の会長は大演説しているわけですよ。「我がバレーボール協会は他の競技と違って自己資金はたくさんあって」と威張っていたね。威張っているから「なんでなの」と聞いたら、「皆、うちの会社から持っていった」と。フジテレビとかTBSもそれを取られることを覚悟の上でやっている。ここまで来ちゃうとね、企業におぶさっていくスポーツの一体、意味は何なんだろう。関西で言うにくいことだけど、大阪にもそのような、あまり礼を考えないプロボクサーがいますよね（笑い）。子どもが見ていたらよくない。体重を計る時にはお互いに選手がマナーで握手しないとイケないのに「おんどりゃあ」と（笑い）。これはスポーツじゃない。スポーツは礼に始まって礼に終わるといって、相手を尊敬するところから日本の武道はあるわけでしょう、柔道も。

洋の東西を問わず、スポーツは皆、そうだと思います。相手を尊敬し、相手を敬って試合をする。だからラグビーのように終わったら最後はノーサイド。皆、一緒になって裸になってやる。これがラグビーの神髄でなければならない。ラグビーのみならず、スポーツの神髄でなければならないと私は思っているんです。

日本ラグビー協会の悩みと、どうやって日本のスポーツを盛んにするかということに一生懸命に取り組んでいるんです。日本の方も、型にはまりすぎているなという感じは私自身、もっているんです。早明戦を見ていて感じた。スタンドオフかハーフだったか、ロングパスをやった。2回とも成功しなかったですよ。ロングパスでうまく速くウイングまで持っていこうということだったんでしょうけど、2回とも失敗したのはボールが山なりだった。ボールを取る時には相手が、パンと来る。2回とも失敗したら、やめるのかと思ったら、後半またやった。今度はそれを狙っていましたから明治が、パンとインターセクトして独走トライですよ。点差が開いていたからいいけども、白熱の試合だったら興ざめですよ。ああいう失敗を何回もやるというのは、今の学生はせせこましい、もっとおおらかにやれないのかなと思う。あまりにもフォーメーションにこだわりすぎていて、相手を見て戦法を変えていくことができないのか。ラグビーの場合、あまり監督は口を入れませんよね、選手自身の判断でチームリーダーがやっていくことなんでしょうが。もう一つは平尾さんや3人の方々で議論していただきたいんですが、ペナルティをとってタッチさせる。それは有効ですよ、マイボールになるから、ラインアウトで。目の前あと5ヤードか3ヤードの時、同じパターンを明治はやっていましたね。自動的に後ろに下がっている。あんなことまでしなきゃならんのか。なぜ明治はあれを表面で、バンといかんのか、と。ラインアウトやると勢いが止まっちゃう。せっかく押してきて、いいところまできて、苦し紛れに早稲田は反則をする。さあチャンスだ、その勢いで行かなきゃいかんのに、ラインアウトに行ってもまだ進む。そのラインアウトで必ずしも取れるという保障はない。フィフティ・フィフティですよ、見ていると。あんなことをして何回も繰り返して点数を取ることに、もうちょっと臨機応変な戦略が

立てられないのかと思うんだけど。最近の学生が、どうも決められたことを何としてもやろうとするのを見ておきますと、日本のラグビーはもう一つ強くない原因が、そこにあるような気がするんです。

日本のラグビー協会にとって、大きなテーマがいくつもございますけど、国際試合を見てみるとアンダー21とか高校生は世界でも強いですよ。かなり強いです。大学も世界の国々と負けてないです。大学も強い。毎年、ケンブリッジとオックスフォードが交互に来ます。最初の年は2校一緒に来ました。来年も一緒に来ると思っています。これは読売新聞です。すみません、朝日新聞には(笑い)。読売新聞でずっとやってくれて来年で10回です。今年も同志社とやりましたよね。同志社は勝ったのかな、負けたのか。惜しかったね(笑い)。だけどほとんど差はないですよ。大学生たちのチームはかなりヨーロッパの先進国、豪州とも互角に戦える力はある。そこで世界の大学のトーナメントをやったらどうか。呼びかけてね。10カ国とか12カ国に来てもらって日本で大学の国際大会をやる。これなら8強には残れます(笑い)。そういうことも一つ、協会として考えてラグビーの盛り上げを図ってみたいなということでありました。

もう一つはすでに作業が始まりましたが、今のトップリーグ14、これをプロ化することに踏み切れるかどうかということでしょうね。大学までは何とか互角にやっているのに社会人に入っちゃいますとグリーンと外国の方が強くなる。それは全部プロだからですね。日本は会社には帰属していますから、神戸製鋼もサントリーもNECも。NECと東芝の試合、神戸製鋼とトヨタの試合になると選手に迫力が出る。ところがそこからピックアップされた日本代表になると、あの対抗試合の時のようなエネルギーが出てこない。会社人間の真面目人間が多いから会社のためなら命かけてやる。「日本代表は出られてよかったね、怪我しないでやろうか」というところがある。平尾コーチの責任でもあるのだろうと思っているんですが(笑い)。そういうことを考えると、「プロ化」をはかることを考えないと世界の強豪には対抗できないのではないかということで、日本協会としてはトップリーグの14チームを、もっと面白く、技術をさ

らに向上できるラグビーに持っていこうと考えております。今日は大変いい機会でございますから、いくつか問題点を出しておきましたので、先生と3人の神戸製鋼の3人、日本協会にとっても大事な方々であります。大八木さんは子どもたちに一生懸命ラグビーを教えておられて痩せるような思い、あまり痩せておられないのですが(笑い)。ぜひ、そういうお話を、この後、皆さんでやっていただいて、大いにラグビーのファンをたくさん作って、ラグビーをさらに面白いスポーツにすることにご協力をいただきますようお願い申し上げます、私の最初の基調講演の責任を、これで終えたいと思います。ありがとうございました。

〈横山〉どうもありがとうございました。スポーツが抱えている、悩ましい問題を単刀直入にお話いただきました。国家保障とお金の問題、それと企業サポートとの関係、これを宿題としていただきましたので、後で議論を進めたいと思います。森先生にもう一度大きな拍手をお願いいたします。

シンポジウム

〈横山〉それではキーノートレクチャーを始めます。4人の先生方にご講演をいただきます。まず平尾誠二さんからお願いいたします。

キーノートレクチャー1 「なぜ、日本でラグビーワールドカップなのか？」

〈平尾〉皆さん、こんにちは。今日は後半のキーノートレクチャーを、林さん、大八木さん、私、真山先生で進めていきたいと思っております。僕のテーマが「なぜ、日本でラグビーワールドカップなのか?」。前半の森会長の話とほとんど重なってしまっていて、森会長は際どい話をされていたのでドキドキして聞いていたんですが、これからどうしたら日本の招致活動が有利な状況になるのか。二つのテーマ、「日本のラグビーの人気の向上」と「ラグビーのグローバル化」について、その中身について触れてみたいと思っております。

「日本のラグビーの人気の向上」についてです

が、日本のラグビーの人气が少し低迷しているというふうに最近、言われています。サッカーなどの他のスポーツが、ある意味人气が上がってくる中で、相対的にラグビーの人气が停滞気味であるということだと思います。これに関してちょっと刺激的な起爆剤が必要であると、関係者一同考えておりました、それにはワールドカップが一番起爆剤になるのではないかと考えて招致活動を展開していたということでございます。ただ日本の競技力が問題になっているということの中で、代表チームの強化を同時並行的にやっていかないといけないというのが大きな課題であったわけです。日本の国際ランキングは18位なんです。やり方次第ではもう少し上までいけるんじゃないかと思ひまして、エディ・ジョーンズというオーストラリアの監督をした人が日本に来た時、彼曰く「10位まで日本は戦えるぞ」と。ランキング10位まで、うまくいったら勝てるという彼の見解もありまして、それを目指しながら今後やっていかないといけないということではないかと思ひます。

具体的にどういふふうに「強化」していくか。代表チームが強くないと、いろんな意味で集客、マーケティングを考えても、現実問題として難しい話です。「昔の日本代表は強かったのに」とよく言われます。僕なんかの経験から、そんなに変わらないなと思ひて見てたりするんです。確かに格差が出てきたという感じはしますが、極端に弱くなったのではないわけで、これから策を講じないといけないということだと思います。

今、もっと日本代表チームをたくさん合宿させるとかという話もあったりします。実は効果はないなと思ひています。それよりもトップリーグが、もっと活性化してって、日常的なゲームのレベルが高くなると、いくら集めたところで強くない。トップリーグは4年目に入っていますが、確かに少しずつ成果は出てきてまして、韓国という格下のチームには負けません。ちょっと前まで、いい勝負をしていた。ところが今はシャットアウトで50点くらい入れるんです。これは5年前では考えられなかった。ちょっと日本の格下チームには格差が出てきている。もう一つランクが上のチーム、8カ国から10カ国との差が、ちょっと開いてきている。格差が出てきています。ただし日

本は微妙に上のチームにうまくついていながら、ちょっと差は出てきつつも、ついていっているという状態ではないかと思ひます。それより下のチームとはかなり格差が出てきている。これはどういふ影響か。トップリーグの影響だと思います。韓国がトップリーグのようなものをつくってくれば別ですが、今の状態であれば、差はさらに開くな、と。トップリーグ等の大会を活性化することが強化の近道ではないかという気がしています。その中の延長線上で強化が図れるのではないかと思ひておりました。

もう一つは「ルールが日本にとって有利なのか？」という視点も重要です。日本の国際競技で、昔、強かったものが今は弱くなってきた。バレーボール、スキーのジャンプ、体操、柔道。ルールに日本が影響力を持ってない。外交力そのものになってくるのではないかと思ひますが、バレーボールは一時、黄金時代があったと思ひますが、ルールの改正、ラリーポイント制を持ち込まれて、勝てないのではないかという気がしています。ラグビーの「総体重制」、初めて聞いたんですが、「ほんまなの？」と思ひます、そんな話あったのかな、と。実際、やれるかどうかわかりませんが、ルールの改正は試みないといけないところですね。日本が積極的にアプローチしてもいいところかもしれないです。ラグビーの面白いところは、ペナルティがあった時、そこにいろんな選択ができる。ラインアウトのノットストレートがあった時、スクラムなのかラインアウトかを選択できるというルールがあります。他の競技ではないような特殊なルールです。それをチームリーダーが自分たちに有利な、ラインアウトが取れそうならラインアウトを選択して、スクラムが強いと思ったらスクラムを取れるというルールの解釈を、もう少し拡大するという、あらゆる場面でも選択があったら、もしかすると日本にとって有利になるかもしれない。これは検証してみないとわからない。そういうものをこれから作っていかないといけない。強化と、一方ではルールを視野に入れながら、日本がもし、イングランドに勝つのなら、このシナリオをつくった時、どういふルールになったら勝てるのか、ラインアウトをなくしたら勝てるかもしれない、そういうシナリオの中でルールを考えてみるという考え方もあるのではなかろうか、と。強化という

のは非常に大きな枠組みで考えないといけない。我々は「もっと鍛えないといかん」という狭い範囲で考えてしまいがちですが、もっと大きく考えたら、ボールの形が丸くなったら日本にとって有利かどうか。たとえば、ですよ。こういう考え方も、一方ではあるんです。狭い考えで考えていくと勝ち目はないんですね。シナリオから考えていくという、勝つシナリオを考えた中で、そこで必要なものを、どう変化できるかというやり方が必要ではないかという気がします。副会長の和田さんも来ておられますが、一度そんなことも検討に入れて考えていくべきではないかというふうに思っているわけです。強化を考えるなら広く考えないといけないということですよ。

二つ目の「ラグビーのグローバル化」。これもサラッと森さんが触れられましたが、これは重要なテーマだと思っていて、日本にはこれがチャンスになるのではないかと思います。アジアには世界の人口の約60%いるわけです。ほとんど不毛なんです、ラグビーは。競技人口は少ない。ずば抜けて日本が多い。日本の競技人口は13万人、1位ではなく5位なんです。ただ、ずば抜けてアジアの中では多い。IRBは、この60%の人口をどう取り込もうかということを経営的に考えないといけない。そこで日本の存在価値は高いわけです。これを売りにしていけないといけない。2015年のワールドカップの時には、これをどう売りにできるか。さらに、その中でリーダーシップをどう獲得できるかが大変重要なテーマになってきているのではないかと思います。多分、このままラグビーが世界の競技としてやっていっても、今の人口分布の中ではあまり影響力は持てないと思います。2012年のオリンピックの競技には外れたわけです。次のオリンピックはどうかかわからないですが、この状況が変わらないと変化はないと思います。アジアにおける競技人口の拡大・普及は重要なテーマになっているのではないかと思います。その中での日本の位置づけは大変重要なものではないかという気がいたします。

これがワールドカップの次の招致においても重要なことではないかと思えます。4つ上げています。「外交」、「日本代表チームの強化」、「普及」、「マーケティング」。この4つについては前回のワールドカップの招致の時もいろいろな意

味で試みたんですが、力不足の感があった感じがしますので、もう少し見直し、さらに具体的な策を講じられるような展開があると数年で必要になってくると思います。それがうまくいけば可能性は高いのではないかと考えていまして、2015年に立候補する国もちらほら聞こえてくるのが現状で、イングランドが立候補するのではないかということもあって、そうした時にはどうするのだ、と。私は「2011年、共同開催可能性はあるのではないか」と思っている数少ない人間の一人です。僕ら、そっちの方が一番得ではないかと思っています、実は。ニュージーランドも問題を一杯抱えています。大会やるとなれば百数十万人の人たちが見に来ないとペイできない。人口が250万人、300万人未満だと思います。そうすると多分不可能なんです。開会からお客を見込まないといけない。そのためのホテルも絶対不十分なんです。グラウンドのキャパシティは3万5千人～4万人と最低義務づけられていますが、これもいくつか不十分なことがあって、問題も大変多いわけでございます。「一部、日本がやってくれないか」と、直前に依頼が来たらうれしいなと思っていて、少し前に言ってもらわないと困るんですが、日本のプールだけやってくれというなら、おいしいかな、と。お客になりますよね。その分に関しては、日本でうまく消化できるのではないか。「決勝トーナメントは、ええやないか」と思っていていまして(笑)。たとえ日本が出たとしても、ニュージーランドでやるとしても、ええやないかというくらいの思いきりがないと、この話は呑めないんですね。「ちょっと期待している方がいいのかな」というのを実際のところ、感じているところです。そんなことを言うと、「情けないことを言うな」という声も時々聞きますが、こういうのは現実的に物事を考えないといけないと思っていて、「そんな考えもありかな」と思っています。あまり当てにしていけないので、他力本願ですから。向こうが、そう言ってくれたらやろうかという話ですから、こっちから言える話ではないわけですよ、それをうまくどこかで狙いながらも15年を目指すというのが、今の現実路線ではなかろうかというような気がいたします。

2011年でも15年でもいいのですが、日本にワールドカップをぜひとも開催したいと思いま

す。今のラグビーの人気は相対的に低迷しているという話がありますが、ワールドカップ開催は、人気を回復する大きなポイントになるのではなからうかと思えます。何とかそうなるべく、全力を尽くしてまいりたいと思えます。

最近のラグビーの人気に関して、皆さん方どういうふうに見ておられるか。大学ラグビーは人気があるんです。特に今年、早明戦が超満員になりました。早慶戦も超満員になりました。両方の成績がよかったということもありましたが、僕は違った見方をしています、実はその前まで早明戦も毎年何千人単位で減っていた。早慶戦の客も、そういう傾向にあった。しかし今年はお客が増えた。その前から言っていたんですが、最近では情報社会です。ラグビーの質がどこのチームも均質化し始めた。特徴がないんですよ。昔は「同志社のラグビーはこんなラグビーだ」、と。まとまりのない、自由で勝手にやりよる。相手は守りにくいんです。これがゲームとして微妙なバランスをとる。早稲田は当時、揺さぶるといって、もともとフォワードは大きくないからバックスの力を使って得点しようという考え方。明治は逆ですよ。大型フォワードを使って、余っていてもフォワードで行くみたいなどころがあって、これはこれで醍醐味だったんです。こういう特徴だったのが、最近、変に賢くなりまして、「こんなラグビーをしたら効率的に点を取れる」という方向に行ってしまうと、同じようなスタイルになってきたというのがここ何年かの傾向だったんです。ところが今年には明治は何を思ったか、フォワードにこだわるといって、ちょっと前のスタイルに戻ったんです。慶応も松永という監督になって伝統的な、えげつない練習をやっているわけですよ。ちょっと昔に戻って個性が出たんです。これが実は対決する時の面白みになっているんです。こういうものが大学ラグビーには必要なのかなと、最近、そんな見方もしています。ゲームの高度な質を見るより、持ち味を見にきておられる方が多いのかなという感じがいたします。

同志社にもぜひともそういうものを復活してもらいたいと希望しています。勝つ、負ける、勝った方がいいんですけどね、見ていて「同志社だ」といって、どんなジャージーを着てても、同志社だとわかる。今はジャージーが変わったら、どこのチームかわからないです、というよ

うな感じを皆さんも持っておられるのではないかと気がしますので、そういうラグビーをぜひとも展開していただきたいと思えます。

ワールドカップと関係ない話になりましたけど、今日来られている方は同志社のファンが多いと思えますので、そういうものを、一ファンとして期待したいと思えます。

〈横山〉ありがとうございます。平尾さんには他力本願じゃなくて、2011年に向けて、平尾さんに内緒でお話が来るように、また外交していただければと思います。よろしく願いいたします。それでは林さん、お願いいたします。

キーノートレクチャー2 「ラグビーワールドカップとは？」

〈林〉皆さん、こんにちは。「ラグビーワールドカップとは？」という題をいただいておりますが、ラグビーの歴史の話なんか案外面白いのではないかと思います。イギリスに行きまして、パブで飲んでいる時、オールドラグラーと話をしました。「ラグビーのルーツって、なんなの？」と言うと、「それは1823年、ラグビー校でフットボールの試合中、ウィリアム・A・エリス少年が興奮のあまりボールを持って走り出したんだ。これがラグビーの起源だ」。こういう話を聞かされるんですね、どこへ行っても。碑があるんですが、昔、今日の3人でそこで写真を撮ったこともあるんですね。この逸話は大好きなんです、イギリスに行ってオックスフォードを中退で帰ってきたんですが、向こうで勉強していた時、若干、ラグビーのことを調べたんですね。どうやら事実、そうじゃないようなんです。

中世の頃、ヨーロッパでフォークボールという、ボールを使って町中を挙げたお祭りで、2つに分かれて町の端から端までボールを運びあいをしてきたような祭りが、フットボールの原型なんですね。ところが非常に危険だった。怪我人が続出するというので何回も弾圧を受ける。産業革命が起こって廃れていくわけです。このフットボールはパブリックスクールという教育の場で継承されていった。19世紀に入りまして当時、支配階級は家で自分の子弟を教育していた。エリート教育を打ち出したパブリックス

クールに子どもを行かせる。当時は、学校の中で強い上級生が学校を仕切っていく、統治していくという制度があった。その中で生活させることが男らしさ、自分たちの作ったルールの中で生活していく独立性を身につけるのに有効ではないかと考えられたわけです。それで皆、パブリックスクールに行かせたかった。

そこでフットボールが大きな要素となりまして、映画の「ハリーポッター」を見ていただくと寮対抗でスポーツの試合をやる。スポーツでリーダーが仕切っていくようなスタイルで教育させよう、と。男らしい、荒々しいものも必要だけど、それだけではだめだ。階層主義社会、排他主義社会、イギリスは今でもスノビッシュなところがあって階層社会なんです、エリート意識を持った、男らしく、荒々しく、自立していて、しかも紳士的でなければならないというものを志向してフットボールができていったわけです。

当時は交通の便もない中でパブリックスクール独自のフットボールが発達していくわけです。大概のグラウンドは硬い。石畳のグラウンドとかボールも持てないフットボール、昔のラグビーはハッキングというのがあったんです。脛をバンバン蹴って蹴られて折れたというのが、もともとラグビー校でやっていたラグビーのルールでして、こういうものできないフットボールがやられていた学校もあった。ところがラグビー校ではふさふさした芝生が生えていまして、ここでボールを持ってハンドリングしていいよ。蹴ってもいいというルールのフットボールが行われていたわけです。

ウィリアム・A・エリスが走ったのではなく、フットボールが寮対抗でやられていた。これは人数も実は平等ではなかったんですね。100人对80人とか、押しくらまんじゅうしていたわけです。1時間かかった速攻とかね。それくらい点が入らなかったのか、もともとそういうスポーツだったようです。紳士を教育する中でフットボールが行われていたということです。

1840年代になるとフットボールがオックスブリッジに行ってプレーされるようになっていったわけです。ところがルールが違う。いろんな議論が重ねられて、どういうフットボールをしたらいいか。この頃になるとクラブができてきて、フットボールもプレーされるようになる。

交通の便が発達していく。対抗戦が始まる。メディアができる。どんどん発信されて皆が知るようになって広まっていく。そんな中で1863年、ケンブリッジでルールを決めよう、と。ハンドリングができない、ハッキングのないフットボールのルールが採択されてフットボール協会ができたわけです。これが今のアソシエーション・フットボール、サッカーの元になるわけです。これとルールの違う、ラグビー校でやっていた連中は、それでは面白くないということで、これには入らず脱退した。70年、80年の間にアソシエーション・フットボールが広まっていった。その後を追ってラグビーは1871年にラグビーボール・ユニオンを作ったわけです。この当時からオックスブリッジの試合が始まりまして、ただそこでハッキングは拒否反応が多かったので、このルールを外してハンドリングゲームが作られたわけです。オックスブリッジというのは、この対抗戦、当時、一番レベルの高いラグビーの試合だったわけです、世界中で。一番最初にオックスブリッジのラグビーの試合は20対20だったそうです。そういう中でラグビーができていった、と。

ラグビークラブができていく。ロンドン近郊に上流階級が中心になったクラブができていく。イングランド北部でもだんだん労働時間が短くなっていく。金銭的な余裕ができてきたワーカークラスがラグビーを始めていく。対抗戦が始まる。何とかカップという優勝を決めるような試合が人気を博してきた。ロンドン近郊の方が強かったんですが、だんだん10年くらいたつと北部のワーカークラスに勝てなくなる。地域で応援していこうという雰囲気になっていく。いい試合をするためには試合をする時には仕事ができない。それをどうやって保障するか。ブローケン・ペイメント、休業保障のお金を渡していく。こういう流れになっていく。一つは商業化を防ぐために、ロンドン近郊の連中は負けると面白くない。そこでアマチュアリズムの観念を持ち出して弾圧しにかかるわけです。1893年、アマチュアリズムのルールが法制化される。「試合に参加するために物質的な利益を得ることは許されるべきではない」ということがルールに入ったわけです。ブローケン・ペイメントを渡していた北部の連中は袖の下でやりあいをした。さらにそれを弾圧しにかかって

いった。実はラグビーは2つに割れまして、北部の22チームがラグビーユニオンを脱退してラグビーリーグを作った。13人制のプロを認めたリーグがあるんです。これが世界に2つ、広がっていったというのが歴史なんです。

日本に入ってきたのはラグビーユニオンでした。ラグビーユニオンは世界に発信していく時、すでにアマチュアリズムの観念を強くもっていた。ジェントルマンネス、紳士的であること。フェアプレー、英国紳士たるために作られていったラグビーが世界に広まっていたという要素を強く持って入ってきたわけです。日本では最初、慶応で行われた。R.B.クラークというケンブリッジから来た教師が昔、ケンブリッジに留学していた田中銀之助を誘って、今のスポーツのない時にラグビーをやらせた。これが歴史であり、三高に始まって、同志社大学に1911年始まって、今でも残っている伝統が同慶戦なんですね。

ラグビーはそういう要素を強く持っていて、日本でも対抗戦が、もともとのスタイルなんです。オックスブリッジは今でも対抗戦しかありませんね。対抗戦グループとリーグ戦グループと、2つに分かれている歴史があります。やりたい時にやりたいところでやっていたらいいじゃないかというラグビーが、日本一とか世界一を決めていこうという流れができてきて、推測ですが、ラグビーユニオン自体はトップを決める時には若干否定的ではなかったのかな、と。南半球のニュージーランド、オーストラリアが、そちらに積極的であったのではないかな、と。第1回ワールドカップがニュージーランドで行われた。共催国オーストラリア。87年ですね。皆で行ったんですけど、その時、私はたまたまキャプテンをさせてもらったんです。

世界一になろうと思ったら強化をしないとイケない。アマチュアリズムでやっていては世界一は取れないんですよ。強化していこう。そのためにどうするか。袖の下でお金を渡すわけですね。しかし認められてなかった。昔はブーツマネーをもらったとね。スパイク履いた時、ウェールズの有名な選手がスパイクを履いて。それで「飲み代」としてちょっとしたお金をもらったのが問題になったという時代もありました。それはやってはいけなくなって、袖の下でやるのを認めようやということで、1995年、プ

ロ化が認められた。これがラグビーユニオンとラグビーリーグが分かれた1895年から100年たった時です。世界がプロ化して変わっていくわけですよ。日本のアマチュアリズムは独特で企業スポーツという、世界にはない形です。神戸製鋼でも出張扱いで出してくれる。そうならないところもありましたが、企業におんぶにだっこされながら発展してきた。それがオープン化してきてプロになると「やるスポーツ」から「見るスポーツ」になっていく。どうやったら面白いのか。ルールが変わっていきます。かと思うと疲れた選手が怪我をしたふりをして交代する。昔は、交代は0だったんです。我々がやっている時は2人まで代われる、怪我してだめだという時は。これが交代を認めようやということで、ラグビーは15人でやるスポーツから22人でやるスポーツになったんです。もともとキャプテンが仕切っていたスポーツから、監督が、どこでどういうふうに関与して選手を代えていくかというスポーツに変わっていったわけです。その流れの中でトップリーグもあるというのが現状です。

そんな歴史の中で、僕はここにいる2人とともにラグビーをやってきた。岡先生が監督をされていて、それに憧れて紅白の縞のジャージ、桜のマークがついたジャージに憧れて、徳島の田舎の頃からラグビー雑誌を見て「あのジャージを着たいな」と思っていたんですよ。私にとっては紅白の縞のジャージ、桜のマークがついたジャージは最高のジャージなんですよ。私は命かけて。強化の問題はいろいろ言われるけど、最後は国の代表たる誇り、責任感、これ以上のものはないぞ、と。オックスフォードでやっていました。体力の違いを感じるんですよ。当時は日本では一番デカかった。負けなかった。強かった。ロックという一番デカイ奴がやるポジションをやっていました。でもイングランドに行った時、2mなんです。2m10cmなんです、同じポジションの奴が。私にその役割は望まれていない。フロックに代わって何とかポジションを取りました。差はあるんです、歴然として。ここをどう埋めていくか。それをずっと日本のラグビーはやってきたんですね。

それはわかっているんです。精神的になるかもしれませんが、私はそうではない。誇りを持った思いがプラスαの力を生む。強化はやらない

といけない。でも最後は、一番大事なものはそこではないか。フランスの監督が途中で代わりました。アホかと、なめるなよ、と。ノーサイドの笛が鳴った時に、皆がね、バタッと倒れる、そんな試合をしろ、と。皆見にきてくれると思うんですよ。私はそう思います。

私は「ラグビー寺子屋」を震災の時、立ち上げまして神戸でスタートしました。子どもたちにラグビーの基本を教えるのと、ラグビーの話をしていきたいな、泥のついたままボールを目の前に置いてあげた時、子どもたちがどんなことを感じてくれるかなと思ってやってきたわけですが、これを全国でやりたいなとNPOにしました。NPO「ヒーローズ」という名前です。各地に行きたいなと思っています。泥のついたままの体験を聞いてほしいんですね。それで「エッ」と思ってくれたらいいし、どう感じてくれるか、私のテーマは「感性教育」、「スポーツ教育」ということなんです。

今、「乾いた時代」というキーワードがあると思います。何か、乾いているね。水気が少ないんじゃないか、世の中。水気が少なくなると、お絞りもカラカラになって軽いですね。生活の中の水気が少ないから軽いよ。生活が軽い、生きることが軽い、命が軽い。だから自殺したり、人を殺したりする。湿り気がない。湿り気はどこから生まれるの。それは汗でしょ。涙でしょう。ラグビーやって泣きますよ。同志社でスクラム組んだし、岡先生に「こら、お前ら、そんな走り方するなら、ずっと走っとけ」と。忘れもしません。大学1年の合宿の初日ですわ。もう、インターバル終わらないんですよ。言うようにしてね、宿舎の階段登って、それが私の心を一杯一杯揺さぶってくれました。そこから沸き上がってきたんですよ。そんな体験、すごく大事な。今、乾いてるやない。そういう湿り気を伝えていきたいな、とNPOができました。遅々たる歩みです。でもね、年間10回やったら、100人ずつ来たら1,000人に伝えることができる。10年やったらワールドカップまで9年ですわ。ラグビー人口10万人くらいやから1割かなと思ったけど、13万人ということで、ちょっと足りませんでしたね、7%。13年続けたら1割です。これを伝えていったら何かよくなっていくのではないか。こういう活動をぜひやっていきたいな、と。大八木さんの発案で「H20」(林、

平尾、大八木のイニシアルを冠にしたラグビーを中心とする社会貢献を目指す活動体)ができてまして、またそんな話もあろうかと思えますけど。

調子に乗って話をさせていただきましたが、NPO、お金がありません。どうやって回そうかなと考えながら、3月20日、設立したのでパーティをやろう、と、大阪リーガロイヤルホテルで。宣伝ですけど。ぜひ、よろしかったら皆さん、来ていただきたいと思います。ほんとラグビーが好きで、一生かかかっていきたいなと思っています。

〈横山〉前半は大学院のシンポジウムらしく、アカデミックにまとめていただきまして、後半は、思いに溢れた「林ワールド」を語っていただきました。ありがとうございます。それでは大八木さん、よろしく願いいたします。

キーノートレクチャー3 「ラグビーワールドカップに波及効果はあるのか？」

〈大八木〉こんにちは。いやあ、やりにくいシンポジウムですわ。横山先生、真山先生、新川先生を中心にしまして企画・立案・運営ということで、「大八木やってみろ」と言われました。1年ほど前ですわ。いろいろ考えたわけです。この3人もね、夏くらいかな、3回くらいチーム合わせしたんです。「平尾はスマートにやってや、アカデミックに。林さん、残り3分のあの熱い話を15分間やってくださいよ。僕がサラッとまとめて、後は先生で、ええ話」、と。いやあ、林さん、とられましたわ、話を(笑い)。

私も今年は幸い同志社大学大学院総合政策科学研究科修士2年目です。修論を書かないとあかんことになっていまして、章立てをやっています。難しい状況で、仕事もタイトやったんです。3人、こういう感じになるかなと思っていましたので「メジャーな基調講演、森さんしかないで」、と。直接、電話しました。平尾大先輩にも相談しました。「来てくれるはずないで」(笑い)。「政治家はドタキャンしよるで」。こう、不安なことばかり。彼とラグビー、長いことやってるんですよ、高校、大学、社会人、日本代表。いつも不安は僕にやらされて。ラグビーは分業なんですけど、「しゃあないな」と思っ

て電話しました。軽いんですよ、秘書の方も。「ああ、わかってます、大八木さん、任しといて」（笑い）。延べ58回電話しました（笑い）。11月4日、ラグビー創立80周年のパーティが東京でございまして、直接、森会長にも話しておかないかなんと3回電話しました。「頼みますよ」、「わかってる、わかってる」。あの調子です。「そやけどな、石川の方に行かないかんし」、「頼みますよ」。で、このシンポのことは80年パーティでも言うてはりました、盛り上がったんですけど。

今日来て「これだけは森さん、森元首相、言わんといてや」と私、言いました。協会創立80周年の時、森さんのお話がありました。オーストラリア15、政府高官が決めた15人です。日本代表とゲームしたんです。61対19やったんです。冒頭ですわ、パーティで森さんが、まあね、会長ですからお話されます。どう言うか。「61対19、日本のラグビーが強いかわい、私には評価できません」。前で聞いていました。800人くらいいました。キャップ保持者もいました。「そらそうや。森さんにそんなこと評価してもらわんでええわ」。皆、そう言いました。早稲田で何日ラグビーをやらはったか知りません（笑い）。わかりません。同志社に来てはったら辞められていなかったと思います。「しかしながら、このゲームは有意義やった。まずスコアを見てください。61対19、足しましょう」と言われたんです（笑い）。「足したら80です。よくやってくれました。皆さん」（笑い）。80周年記念に花を添えてくれました。そらね、林さんの熱い話やないですけど、僕らキャップ保持者ですわ。「何を言うとんねん」（笑い）。グワーツとうるさくなってきましたですね、誰ももう聞かへん。もうビールも飲んでました。オーストラリアサイドは失笑でした（笑い）。その後、文部科学大臣副大臣の遠藤さんが出はりました。誰も聞いてはりませんでした（笑い）。ハイヤー降りはった時、「その話だけは、言わんといてや。森さん、頼みますよ」、と。今日は熱い話をしていただきました。ホツとしてるんです。

掴みはこれくらいにして（笑い）。掴みの長い大八木なんです。私のテーマは、ワールドカップにどんだけ世の中に波及効果があるのか。アカデミックであり、修士2年目なら、それくらいしゃべるやろうという横山先生のプレッシャーもございまして、しばらくお付き合

いしていただきたいと思います。先だってテレビのロケでフィリピンに行きました。戦中日本人がフィリピンで開拓する。現地の女性と結婚して子どもができます。第2次世界大戦が終わったら敗戦国でございましてから強制送還させられるわけです。長男は日本につれて帰ったんです。女の子はフィリピンに残す。徳光さんの番組です。年末にやります。その兄妹を再会させるという感動ロマン長編スペシャルです。行ったんですよ。4日間やったんです。嫌やっただけです。だって狂犬病が大騒ぎの時です（笑い）。ダバオというところで2時間ほど飛行機で、そこから車で4時間。野良犬だらけ（笑い）。ようやく妹を見つけたわけです。二間ほどのところで3世帯住んでいる。17人。1ヵ月の食費8,000円。すごいところです。向こうは最大のおもてなしです。水をどこかから汲んでくる。「大八木さん、どうぞ」。飲みまへんわけにいきません、飲みました。そんな中で私、感じました。長男さんが行かれたフィリピンの学校を回ったり、向こうでいう町のホールに行ったんです。気がついたんです。「なんでこんなところにあるのやろ？」というのがありました。1個はビリヤードの台、プールですわ。屋根なんかバナナの皮で張ってあるところですよ。そこにポーンとおいて皆、裸でやっている。もう一つは、バスケットのリング。これはありとあらゆる山奥の谷の川の横にでもあるんです。通訳の方に「バスケットボール、フィリピンに人気なん」「いや違います。」サッカーはプロがあるみたいです。「違うんです」、「なんでや」言う、「バスケットやったら裸足でもユニフォームなしでもリング2つつくってボール1つさえあつたら何人でもできる。1人でもシュートの練習でできる」と。「あ、これか」と思ったんですよ。

私は修論を書きながらいろんなことを研究調査していると、「スポーツの原点でなんやろな」という話になってきました。ラテン語で「デポラターレ」、意味はなんやねん。「移動」とか「離れる」とか「余暇」とか「遊び」とか。フィリピンの山の奥合いで、大変な生活なんです。彼らにとってはバスケットボール、スポーツというのは何か。「今やっている生活よりも非日常生活を味わいたためにスポーツという位置づけでやっているな」ということを、1つ発見したわけです。

2002年、FIFA、日韓ワールドカップサッカーがございました。兵庫県淡路島でもあのベッカムが来ました。ニュースを見たり、ベッカムが去った後、ウェスティンホテルに泊まったホテルも見させていただきました。そらね、あの時の効果、すごいですよ。何がすごい。地域の人にあのサッカー11人、自分の着ていたユニフォーム、ストッキングとか全部子どもにやる、パツと。当然、イングランドファンになり、ベッカムファンになります。それくらい子どもに夢を与えるというのがスポーツでございます。

2011年、ワールドカップ招致が失敗に終わりました、平尾理事の、よしんば共同運営にならないかなという発言、平尾さんもしはるんですが（笑い）、2015年、胸張って単独でやりたいなというのが本音でございます。スポーツ、ラグビーが子どもたちに与える夢、情とか、林さんっぽくなりますが、目に見えない利益、価値が多々あると思います。1995年1月17日、午前5時46分でした。神戸製鋼が7連覇した2日後でした。阪神・淡路大震災がありました。僕と平尾、彼は東灘区で、僕は六甲アイランドでした。家に帰っていました。林さんは東京で飲んでいました、知りませんが（笑い）。信じられんくらいの大地震でございました。普通、神戸でこんなやつたら東京やつたら沈没しているのと違うか。大阪湾、津波なんちゃうか。大変でした。そんな大震災を経験して、2ヵ月後、当時、神戸製鋼の関連会社の広告宣伝業務を担当しているハウスエージェンシーにいました。平尾もラグビー部でございまして、「僕ら7連覇したけど、被災者に何ができるやろ」という話をしました。3月頃から「子どもたちに勇気、夢、与えにいこうや」。神戸製鋼も「そんなためにお金使うなら、ええやないか」。始まりました。ラグビーやって、子どもにラグビーをやらせるのは大変や。ボール遊びでええやんか。体育館借りてね、ボール遊びした後ですよ、雑煮食うたり、餅つきしたり。ワーツと鬼ごっこしたんです。笑いながら子どもたちが走っていた。担任の先生が来ました「大八木さん、あの子ね、この間の震災で妹とお母ちゃん、下敷きになって死んだんですよ」。そらね、まあ、6,000人ほど亡くなられた人がおられます。メディアが来て、NPOもボランティアも立ち上が

りましたが、ほんまにどうしようもない人たちに向かって、僕らが「頑張つてや、復興してや」、そんな言葉、聞く耳は持たへんと思うんですよ。とにかく今の日常、非日常に経験させるような仕組みやつたと、今から思うたら。遊びに夢中になっている子は、一瞬だけでも、忘れたらあかんことですが、そのことに夢中になっていて、1つ結果論としては何か気を紛らわす1つになっていたんと違うか。ということはスポーツは、非日常+遊びというのが大きなテーマであったのではないかと思うわけです。

熱い話もしないとあかんのですが、両方やるのは難しいです。ラグビーも平尾理事、林大先輩、森会長、熱い話をしてくれました。1つ私もこういう話があるので、ということでございます。ノーサイド、なんやろ、と調べました。大きな意味がありました。ノーサイド、ピーと笛を吹かれて、天理と大分舞鶴の全国大会の試合で感動して「ノーサイド」という曲をユーミンが作りました、20年前です。ピーと笛を吹いた。勝った方、負けた方と分かれるんです。勝ち負けが決められても終わったら1つの輪やないかという教えでした。いろいろ調べますと「マイサイド」、「ユアサイド」です。1人称、2人称です。こっちは「もうあなたのすべてを受け入れるで」、向こうも「あなたのことをすべて受け入れるで」。

岡先生が、ノーサイドの笛を聞いて、このような話をしてくれたような気がします。勝った方のグラウンド、ベンチ、ピッチに集まってきて勝った方の指導者、先生、監督が、こう言いました。「お前らな、勝ってもグラウンドであんまり喜ぶな」と言われました。「なんでやねん。勝ったら、ワーツ言うたらええやん」、「あかん」。パツと指さすんです。負けた方ですわ。ノーサイドの笛を聞いて負けた方です。そこはまあ、大学でも一緒です。最後のシーズンの最後の学年でしたらそれで終わりです。ラグビー、こんな巨漢が、ですよ、観客席に一杯いるのに、跪いてオーンと泣きよるわけです。声嘎らして。お父さん、お母さん、見に来ていますよ、後輩も来てますよ。そんな恥ずかしいことない。負けたことの悔しさに皆、泣いてるんです。勝った方の指導者、監督。岡先生、言いますよ。「見てみろ、あいつら、この試合を迎えるまでモチベーションや、我々以上に血流して、汗流して

涙流してたんちゃうか。そやのに、たまたま今日のゲームの発表の場で我々より2つか3つミスが多かったんちゃうか。考え直したらおかげさんで勝てたんちゃうか。言うならば戦友やないか。そんな奴らが人前であんだけ泣いているのに、お前らヤッターって喜ぶ、そんな人間やったら、あかんやろ。そんな男やったら、あかんやろ。」確かに一言、プツンと来ました。

じゃ、負けた方の指導者、監督の先生はどういうか。ウォーンと泣いているわけですよ。それをね、一人ひとりに「いつまでも泣くな」と。それが悲しいんです。一人ひとりに勝った方のベンチ指さして「あいつらな、喜んどらへんけど、心の中で大喜びしとる」。また大泣きですわ、悔しさで。最上級生に「次のステージ、社会人に行っても、この負けの悔しさを糧にして次に生かせよ」。また大泣きです。下級生には「来年1年後はあのチーム、あいつらが試合を挑んできよったら仇打てよ」。皆、大泣き。いつまでたっても泣きやまへん連中を見て、負けた方の指導者、監督は、こう言います。「しかしな、人生勝ち負けや。負けは認めないとあかんやないか。いつまでも泣いてんで、お前ら勝った奴に握手求めて『次のゲーム、僕らの分も頑張ってくれ、今日はええゲームでした』と頭下げてこい」と言います。皆、泣きながらですよ、ルールないんです。地下のロッカーに負けた方が花道を作るんですよ。「ありがとうございました」。これもルールはないです。次勝った方が、また花道作って、負けた奴を受け入れてやるんですわ。

秩父宮ラグビー場という最高のラグビースタジアムがあります。テストマッチもします。トップリーグのいい試合もします。1回、見学に行ってください。ロッカールーム、6～7個着替えるところがあるんですよ。ノーサイドの笛を聞いて試合から上がってきます。涙の跡、汗、血を流すシャワールーム、6個のロッカールームの中には1つも存在しないんです。なんやねん。奥にある1つだけ浴室があって、デカイ浴槽があるわけですよ。そこに勝った奴、負けた奴、負けた奴、勝った奴がワットとここまで湯に漬かって、柱にシャワーが出てるんです。そこで真っ裸で洗いながら、なぜか負けた奴が桶にボディシャンプーと、コンディショナーを持ってきて、先に勝った奴に「使うてくれ」と。そ

んな意識がございます。

そんなことを大事にしてるラグビー選手のノーサイドでして、今の世の中、パチッとテレビをつけてください。どんなけ、青少年、子どもたちが事件を起こしたり、事件に巻き込まれたりしているか。それを評価する大人たちのモラルが、とんでもなく下がってるわけです。今どきようやく出てきました。文部科学省の教育再生ナンチャラもそうですけど、いろんなところが言いだしています。「エンパワーメント」が流行りだしています。なんやねん。「エンパシーを持つてや」。なんやねん。「イントロダクション・プロフィクション」です。「自分の思い、心、どう行動するか。相手にどう伝えるか。またまた相手の心の中をどう自分で受け入れるか」です。森元総理も最後は熱い話でした。青少年教育に足らんもんは、読み書きソロバンも大切です。でもダイレクトに教わったスポーツ、野球もサッカーもラグビーも陸上もバレーボールもバスケットも、ダイレクトに体で体験した中でルールを知る。「人間たるもの」ということを教えられると必ず、子どもたちはインプットできると思うわけです。

修士論文ですね（笑い）。「トップアスリートによるスポーツクラブの構築」がメインタイトルで、サブタイトルが「青少年育成を視座に」ということで、1月12日と提出が迫っております（笑い）。何とか皆さん、パワーを僕に送っていただき、無事書き上げることを期待していただきまして、次の機会のシンポジウムにその結果の話ができるように頑張っていきたいと思えます。どうか、スポーツを文化的装置、スポーツ政策学をようやくあらゆる大学が言うてます。これを僕ら体感してきた人間がちよっとでも勉強して、セオリー、アカデミックを身につけて次の後輩たちにどう継承するか、つなげるかというのも1つのテーマです。後ほどクロストークもありますが、最後までおつきあいいただいて、その前に真山先生の締めがありますので（笑い）。担当教授にバトンをつなぎます。〈横山〉ありがとうございました。これだけ何でもネタにできて聞かせる話術があるんで、論文も、まず大丈夫だろうと思っております。それでは大変やりにくいかと思いますが、真山先生、最後にまとめていただきたいと思えます。よろしく願いいたします。

キーノートレクチャー4「地域社会形成にスポーツは有効なのか？」

〈真山〉森さんの話から始まりまして、今日のシンポジウム、このままですと日本ラグビー協会の主催のようになってしまいますので（笑い）、同志社大学総合政策科学研究科主催ですので、1人くらいは関係者が出ないと恰好がつかないということで。

私はどういう役割なのか。まとめと言われたんですが、今日のテーマには「ラグビーワールドカップ招致を考える」の後に「国際スポーツイベントと地域振興」がかすかについていますが、今までそういう話が出ていなかったもので、そのことも含めて話をさせていただきたいと思っています。私の役目として大学院ではこんなことをやるのではないかというイメージを持っていただくために、スポーツと地域の関係を考えて時、スポーツはどのようなものかということ、5つくらいのポイントで整理したいと思います。

1つは「スポーツを使って地域の経済振興、地域の活性化を図ろう」という考え方があります。合併して上田市になっていますが、長野県真田町、菅平があります。福島県にはJビレッジができています。近畿ですと堺市が大阪ガスから土地を借りてサッカーコートを15面つくらしいです、35億円投資して。そういうことをやってもスポーツを活性化すると、地域にも経済効果があるということです。このあたりはワールドカップのような国際スポーツイベントを誘致することも当然、経済効果を狙っていることもあります。

2番目には「スポーツを地域社会での人間関係、一体感を高めていくために活用しよう」という動きです。この中には子どもの関係で、青少年健全育成も含めてですが、そういう時にスポーツが有効ではないかと言われているわけです。文部科学省を中心に推進されています「総合型地域スポーツクラブ」も、ある意味でそういう目的があるでしょうし、今日、シンポジストにいられている皆さんは、地域とのかかわり、子どもたちとのかかわりを一生懸命活動の中で展開されている方ばかりです。この面はスポー

ツにとって重要なんだろうと思います。

3番目。スポーツは「健康増進」であるとか、最近、メタボリックシンドロームと言われていますが、「生活習慣病、介護予防でスポーツを活用していこう」という動きがあります。

4番目には今日のテーマとの関係で言えば「スポーツを通じて国際化、国際交流を図っていこう」ということがあります。この点で特に有名になりましたのが、合併した大分県中津江村ワールドカップの時のサッカーのカメルーンの関係です。こういうスポーツを使って地域を変えていこう、活力を高めていこうという動きがいろいろあるわけですが、それともう1つ「スポーツそのものへの関心を高めるためにスポーツを使う」ということもあるわけです。4つのスポーツの機能が、ある意味で前提になるわけで、いくらスポーツを使って地域を活性化しようとしても、世間の皆さんがスポーツに関心がなかったら空振りに終わってしまうわけですので、スポーツそのものを通じてスポーツに対する関心を高めていくことが必要になってきます。たとえばプロスポーツでもアマチュアでも相当レベルの高い種目やスポーツを地域の中に呼び込んでいくことによってスポーツに関心を持ってもらうことがあると思います。またワールドカップというのは、最高峰と言ってもいいレベルですので、こういうものを身近に感ずることによってスポーツに興味を持ってもらう。関心を持ってもらうことができるのだらうと思います。

今、挙げました5つのことは、それぞれが独立しているわけではなく相互に関係があります。経済効果を狙うと同時に地域活性化をやる。そう考えてみますとスポーツはいいことばかりのようになるんですが、基調講演の中にありましたようにいろいろと難しい面もあるわけです。それはどういうところがあるか。課題について4点ほど整理してみたいと思います。

1つはスポーツを活用して何かやろうという場合、国レベルで言えばワールドカップとかになると国家保障だ、と。地域レベルでも一定のコストがかかります。お金だけではなく人的なコストもかかります。これはスポーツのために出してもいいという合意が果たしてどの程度まで得られるかという問題があります。とりわけ地域は非常にお金がなくて困っています。財政

状況は厳しいということがありまして、自治体レベルで100円単位の節約をやって涙ぐましい努力をしているわけですが、たとえ10万、100万円でもなかなか出せない。出したい気持ちがあっても出せない。それを出すためには、政治的というより、多くの人の地域住民、国民の支援、支持がないと難しい。これをクリアしていかないといけないのですが、どうしてもスポーツに関心のある人、スポーツ関係者の中では合意ができるんです。一般の人にそれがどこまで合意できるかが難しい。これがある意味、最大の課題なのかもしれません。

2番目はスポーツの種類や大会の程度・規模にもよりますが、冬のオリンピックなどをやりますと、そのためのハードの整備に付随して環境破壊が起こるじゃないか。ごみが増える。混雑する。場合によっては治安が悪化する。そういう地域社会に対するマイナスの影響がないわけではありません。これをどの程度まで解消できるか。いろんな工夫で減らすことはできるけど、0には多分できないと思います。限りなく0に近づけるためにはどうすればいいのか。こういうことを考えないといけない。対策、アイデアを、この観点から出しあえるような体制が作れるかどうか。

3番目に挙げたいのは、特に国際大会をやる時に大都市だけではなくキャンプとか地方都市や小さな町、村もかかわってくる。そこでの地域の人たちのホスピタリティ、もてなしの心、思いやりの心がどの程度まで確保できるか。この点ではサッカーの世界カップの時と、かなりいい事例があって、若干、楽観的に考えることができるかもしれませんが、スポーツとは直接関係ないのですが、観光振興の時に問題になります。自然景観、伝統的な神社仏閣があるということで観光振興をするんですが、観光に従事している関係者はお客さんがたくさん来てくれることはうれしいことです。金儲けにもなりますが、そこに住んでいる人にとっては迷惑な話だということがよくあります。せっかくいい景色があっても観光に行くと周りの人が冷たいとか、何しに来たという目で見られると、次から行きたくなくなってしまう。地元住民のホスピタリティを高めないで観光振興はうまくいかないと言われてます。スポーツイベントをやる時も同じことがあるだろうと思います。盛

り上がっているところは盛り上がっていても、一歩そこを離れると地域住民が冷たい視線を送るということでは、折角やったものが地域に根づかない。一過性のものに終わってしまうのではないかと思います。スポーツそのものに対して関心を高める、興味を持ってもらうことが、どれだけ成功するかにかかってくるのかなと思います。

4番目。特にワールドカップのような、ある意味イベント性の高いものに当てはまることですが、一過性のものに終わらせない体制が組めるかどうか。体制を組むのはスポーツ、スポーツにかかわる競技団体等であると思います。ワールドカップを招致することによってラグビー自体の競技力、レベルをアップしていくことにつないでいこう。これは単にワールドカップを開催したというだけの事実ではなく、それを通じて後々までラグビーのレベルアップを図っていく。これはスポーツ側の継続性、あとへつないでいくという努力です。もう1つは地域社会がそれを一過性に終わらせないかどうか。この点で言いますと、どうしても一時的には盛り上がります。サッカーの世界カップの時もそうでした。しかしそれが終わってしまった後、国際交流はどれくらい続いているか。今、修士論文を書いている方で、このテーマを扱っている方がおられます。国際的なワールドカップのようなものが、果たしてどれくらい地域で根づいて、効果としてどうつながっていくか。研究対象になるくらい大きな課題だろうと思います。そういうことができていないと、折角の大きな取り組みも効果はせいぜい1、2ヵ月となってしまうかねません。

そういう課題を1つずつ解決するという緻密なプラン、戦略を練りつつ、ワールドカップというものを展開していく。ワールドカップを日本に持ってくるだけでもエネルギーが必要です。国際的な取り組み、戦略が必要になりますので、今のような話は国内で緻密に細かくやらないといけないことだろうと思います。これをラグビー協会が全部やるというのは不可能だろうと思います。地域のスポーツにかかわっている人たちがどれだけ協力できるか。スポーツに対する関心、興味をどれだけ根づかせていけるか。地道な取り組み、努力がうまく合体した時に、ワールドカップが単に日本で開かれたと

いうだけではなく、それを契機にラグビーやスポーツが日本の中で文化として定着していくことにつながるのだらうと思います。

今日、登壇されている皆さんは、単にラグビーの振興だけではなくスポーツ文化、スポーツを通じて地域や住民とのつながりを築き上げていくということをされています。ここにお集まりの皆さんもスポーツに関心が高い方ばかりだと思いますので、ぜひそういうことをいろんなお立場で考えて行動していただければ、スポーツ振興にもなり、地域振興にもなる。それが日本のスポーツの力を高めていくことにもなるのではないかと考えております。そんなことで熱い話の後で、私はクールダウンしましたので、これで頭を冷やしていただいたので、もう一度クロストークで熱くなっていただければと思います。

〈横山〉ありがとうございました。先生にはお役目を果たしていただきまして、やっと本日のテーマに戻していただきました。

森先生から宿題をいただいたのは「国家保障」の問題、「企業サポート」の関係。この2つだと思います。今日はずいぶんはっきりおっしゃっていただいたんですが、現役首相の時に言っていただければ、このシンポジウムも必要なかったのかなと思うんですけど、それが、なぜ日本にできないのかという問題だと思います。

お3人がお話しされたように、スポーツには夢、希望、思い、ノーサイド、情的な価値、つまりお金にならない部分、非利用価値の部分がある。しかしそれを支えるのはお金ですので、形式的な価値、知識価値とのバランスがポイントになると思うんです。日本にあまりスポーツが根づいていなくて、税金をそこにに入れていくのに反対の人たちがいて、合意に達しないということだと思います。今日のテーマであるワールドカップの成功もそうですが、スポーツイベントがたくさん日本に来るのですが、真山先生のご指摘にもあったように、一過性で、競技によってメディアの取り上げ方が違うので、バスケットボールなどは寂しかったと思います。新聞である程度取り上げていましたが、あまり関心と呼ばなくて、あまりご存じないという方もおられます。一面ではバレーのようにお聞きすると日本戦だけ特別扱いをしまして、セットご

との休憩時間を長くしたり、優秀選手を日本から選んだり、お手盛りとも言えるようなメディアの演出によって盛り上げようとしている。そういうことでなかなか根づかない部分があるのではないかとこのころだと思います。

日本はスポーツを企業が支えている。きれいごとではなく支える仕組みがないと振興できない。今日、森さんにもおっしゃっていただいたんですが、その肝心の企業がスポーツを支えなくなっている。200とか300とか核になるような企業スポーツがなくなった。なくなったからといって一般の社会の人からはクレームがつかない。逆に株価も上がるという、皮肉にも。そういうスポーツの状況もあるかと思います。思いは大事ですが、それを具体化する時に一つひとつどうして問題を潰していくかということ、大学院のシンポジウムらしい着陸点を作りたいと思いますので、そのへんからお話していただければ幸いです。

1つは「国家による保障」、一面、「スポーツは私的で自由なものだから国による主導はよくない」と学者は言うんですが、現実問題、それでは難しいところがあります。スポーツイベントをする時、「またハコものなのか」ということは付きまとう問題だと思います。そのへんはどうでしょうか。国とか地方行政はどのようにスポーツを思っているか。真山先生に研究者のお立場からご指摘していただきました。課題もいただいたんですが、現実に取り組まれる中で、そのあたりのことについて。

〈平尾〉森さんがおっしゃっていた国家保障の問題は、ラグビーだけでなく、すべてのスポーツにかかわる問題だと思います。スポーツにどれだけの価値があるか。価値の見方だと思います。それはさまざまでしょうが、スポーツの価値について真山先生からも5つの指摘がありました。僕は「スポーツの教育的価値」が高いと思います。今、教育的な問題が大きく取り沙汰されることを考える中でも特に教育的価値が高いのではないかと。スポーツの教育的価値は突き詰めると一つだなどと思っていて、「できなかったことができるようになる」ということを体験することだと思います。単純なんですけど、自分の経験でもあります。できなかったことができるようになった時の喜び、ある種の自己実現なんですね。これが非常に大きな影響を持つ

と思います。簡単に言うと、「やったらなんでもできるようになる」ことを実感することだと思います。シラケないです。やれば何とかかなんというのを体験する力はものすごく大きいと思います。スポーツをされていた方は少なからず感じておられたのではないかと思います。忍耐とか根性かと、あまり好きではないので言わないんですが、こんなものは自然とそういう中から出てくるものなんです、押しつけるものではなく。実は本当に達成したかったら少々のはは我慢してやるものなんです。こういうものを本当に体験しているかどうかが大したことであるので、そういうのをうまく体験させることが、実は非常に価値があるということではないかと思っています。僕自身は「スポーツに教育的価値がある」と思っています。

〈林〉国家保障、企業保障とか、制度には全く疎いところがありまして、生活や社会のために制度ができていくというのが本当だと思います。制度ができてしまうと、また制度のために制度ができるというジレンマを感じるころもありまして。平尾君が「教育的価値」と言ってくれたんですけど、自分もそこなんです。教育的価値。ラグビーを辞めて何をしたいこうな、と。神戸製鋼を辞めて、1年くらい悶々と考えまして。グラウンドの中で一杯感動させてもらったな。沸き上がる瞬間があったな。沸き上がる瞬間というのはね、作れない、飾れない、話は作りも、飾りもできる。これは真実じゃねえぞ。でも作りも、飾りもできないものはなんだ。沸き上がる瞬間、とめどもなく涙が溢れてどうしようもない瞬間、そこに真実があるな。そういうものを心一杯揺さぶってくれて、それが私の感性、沸き上がる湿り気、これを固めずにいてくれたなと思うんですよ。そういう教育的価値を私は感じていまして、今、ヒューマンクリエイティブという教育会社に向向して、「感性教育」、「スポーツ教育」をテーマにNPOで活動していきたいと思うわけですけど。今まで人生40何年生きていて1テーマの言葉として最近出てきたのが、「沸き上がる」という言葉なんです。ラグビーやらせてもらったのも、ひょっとしたら沸き上がる体験をするためかな、と。そして教育をやっているのも沸き上がる体験を伝えていくためかなと、言葉として自分の中で1テーマになってきたような気がしています。

乾いた世の中、時代に対して沸き上がるものが必要だ。沸いてこない。心の揺さぶりがないとね、感情硬化症、感情が揺さぶられていないと固まっていくんですね。涙とか笑いとか、揺さぶられるわけですよ。これが揺さぶられず、固まっていったら感情硬化症になって、オウム真理教事件の時に言われたことですが、固まっていたら人の悲しみ、苦しみ、涙は揺さぶりですから、固まったら入ってこない。感じられない、人の悲しみも。人を刺しても平気で、何も感じないことにつながっているのではないかと。沸く体験をしないとイケないなと思います。〈横山〉教育的価値ということで、内容の問題ですね。それは、皆、共有できるかと思いますが、それが制度となった時には、なかなか保障がない、サポートがないということだと思います。大八木さんには「内容と制度」の問題ということでいかがでしょうか。

〈大八木〉平尾君が言いました教育の一環の中、それと国の施策がどう一致するか。国の利益ということがあるわけですが、各スポーツ団体、プロ野球もJリーグも体協もスポーツを振興していくためにいろんなことにお金を作ったり、やっておられます。しかしなぜうまくいかないかということは、競技をやっていたトップアスリートたちが、平尾君、林さんが言うように、直接、子どもと対話して、汗かいて、指導できるかというシステムがまだ構築されていないからです。そのへんをトップアスリートの選手たちが政治や企業や地方自治や、学校やメディアに利用される「乗り」ではなく、トップアスリートが逆にそれを利用して子どもたちの自己実現のために活動する。マズローの生理・安全・社会・自尊・自己実現というのがあります。子どもたちも、大人もそうですが、人間としてのコミュニケーションがとれないのは生理・安全のところをきちんと教えていない、と。文部科学省、先生方に多々感じます。そこをしっかりと人間のコミュニケーションをとらせる役割をやれば、国家も平和になるし、治安の安定と違うかな、と。そこに国の予算を落としこむことは無駄な話ではないんで、ワールドカップは、その一つのコアとして発展していったらいいかなと思うわけなんです。真山先生、まとめてください（笑い）。

〈横山〉大八木さんが司会も兼ねているようで

すが（笑い）。真山先生、スポーツ振興がコストだと思われている、と、スポーツ仲間ではそれをストックにしようということですが。今の教育的効果から言えば、教育は100年の計と言われるように即効性のある効果は出なくて、当たりまえだ、と。行政も関係部署の方は大変な努力をされていると思いますが、他の関係との横断的な取り組みは難しく縦割りになっていますので、内部での調整も相当苦勞されていると聞いています。その部分と「コストではなくストック」に持っていくことを合意形成するために、スポーツ団体はどういう働きかけをしていけばいいか。この2点をお伺いしたいんです。

〈真山〉今、3人の方がおっしゃったようにスポーツの教育的価値、意義、効果、これは多くの人がそれなりに認めているだろうと思います。それに対していくらお金を出すかという話になると急に水気がなくなりましてドライな話になるんですね。1つは今まで競技団体にしてもスポーツ関係者にしても、国の行政との関係で言うと文部科学省というところが、たまたま体育も含めてやっていたので、そここのつながりが強いんですね。それは基本でいいんですが、もう少し横断的なつながり、つきあいを広げていかないと、予算の獲得とかお金の配分ということでは文部科学省の系列だけでは限界があるだろうと思います。文部科学省だけでは、学校教育の部分とはもかくとして、スポーツについての予算を取る力はそんなにないんですね。いろんなところから味方、応援団を作らないといけないのかなという気がします。

これは研究者の課題かもしれません。先日、日本体育・スポーツ政策学会がありまして、そこで話をさせていただきました。研究の立場からスポーツをいろんな角度で研究していますが、たとえば経済学者が真正面からスポーツを取り上げて研究することはそんなにないですね。教育的価値を含めていろんな価値について、概念とかスポーツ関係者の熱い語りはわかるんですけど、実際、お金を出すとすると、「それでいくらの経済効果があるか、金銭的に置き換えたらどうなるか」という話になった時、それに答える材料があまり準備されていない。これは、経済学、研究者がスポーツについてもっと目を向けて研究を蓄積していかないといけない

のだろうと思います。同じことは経済学だけでなく、政治学、法律学とかいろんな分野でスポーツをテーマにした研究を蓄積していったら、スポーツをアカデミックの世界の中で位置づけていく。そうすると、予算を取ったりする時でも単に意見とか考えだけでなく、ちゃんとした根拠になるデータを示しながら論議していきける。思い、熱さと、データに基づく論理の2つがみ合うと非常に強くなるのではないかという気がします。

〈横山〉「思いを論理に」ということで、大八木さんたちもそれについてはいつも言われていることだと思います。それをもって「政策的提言」まで伸ばしていかないと難しいというお話だと思います。それでは、折角ですからフロアの皆さんから、ご意見、ご感想をいただきたいと思っています。

（質疑応答）

〈質問〉真山先生がおっしゃられた経済学研究科を出た経営学者のはしくれです。経営学者でスポーツをやっているものはなかなかおらんものですから、アカデミックの世界でスポーツをとらえ、位置づけていくことは大事だろうと考えて活動しております。その中から1つ思っていることがあります。神戸製鋼という企業がスポーツクラブを持っている。これは世界的にも珍しい日本の企業スポーツという形だと思えます。森会長の2つの宿題「スポーツを支える企業とのかかわり方」として、日本の企業スポーツの形は独特だと思いますが、いい面と悪い面があるのだろう、と。何らかの理由で企業スポーツが衰退していているという現状があると思えます。いい面、悪い面を、中におられる方はどのようにとらえておられて、ラグビーワールドカップの招致を考えた時、それはどういうふうに生かせるのかということ、3人の方に伺いたいと思います。

〈横山〉企業スポーツのメリット、デメリットということですね。端的にお答えいただければと思います。

〈大八木〉急速にラグビーもプロ選手容認になってきましたので、我々が日本一になった1988年の時代からすると、企業と選手の間に関係は変化してきていると思います。ワールドカップの招致の怖さは、サッカーを例に上げますと、ワー

ルドカップが日本で行われますとトップ14がどんどんプロ化に拍車がかかってくるわけです。そうすると、全国高校大会で有能な選手、各チームがJのように地域に貢献したプロ化活動になっていくと、サッカー協会が抱えているような1つの課題、大学に行かず、高校生がユースに出る。大学の体育会系のスポーツに価値がなくなってくる時代が来るのではないか。ラグビーもそういうことで、新しい大学はスポーツさえ強くなれば広告塔になるということで、新設校はラグビーの選手を育てる。その学生はラグビーをやりきたんだからという発想でいる。ラグビーの人気の面では大学ラグビーは1つのテーマなんですけど、プロ化に簡単に移行してしまうと、今度はトップの14チームが今の対応で丁度バランスがとれているところでございまして、いたずらにワールドカップが来た、トップがプロ化になった、これでしゃんしゃんとはならない課題が山積みになります。僕らアマチュア主義を厳守した者の次の課題としてあると思います。

企業スポーツのメリットは、僕ら3人はなんやかんや言うても神戸製鋼の社員でおりまして、大学院にも行かせてもらっているような個人的なメリットがございまして。それは企業にとってあらゆるリーダーになるもの、広告塔になるもの、何かの目に見えない価値を求めて、そこから会社も存続があるのじゃないかなというところなんです。ラグビーのアマチュアがプロ化になると、それに企業がどう対応していくかは1つの課題だと思うわけです。

〈横山〉企業のスポーツそのもののメリット、デメリットはどうかという質問ですね。

〈林〉日本の中で企業がスポーツの発展を担ってきたという歴史だと思うんですよ、1つとは。オープンクラブができたんですけど、1つは教育の中にスポーツを取り込んでいったのと、あとは企業が抱えてトップレベルのスポーツを維持してきたという社会的な背景があると思います。企業が力を入れてくれたので競技のレベルが上がっていったという歴史があって、そこにいるから安心してスポーツもできたという、グラウンドを使ったり、夜、夜間照明とか、ずいぶん見てもらっていたわけです、神戸製鋼のラグビーでも。1つ大きく変わったのは「プロ化、オープン化」で契約選手がいる現状は、ず

いぶん昔と違うなと思いますが、プロ化の問題点も出てくるかと思いますが。そういういい面、お互いに企業にとってもメリットがあった、一体感の醸成とか宣伝効果とか。神戸製鋼にはラグビーが合っていたのかな。野球のプロチームを持つとは思わないと思います、経営判断にかかってくる部分から。そんな中でラグビーをやってきたという。プレーする側からするとオープン化によって選択肢が広がったという、いい部分はあると思います。我々の頃は選択肢がなかった。ラグビーをやりたいと思うと仕事を選ばないといけなかった。ラグビーをやる思いが強くて、それで仕事も決まる。ある種、企業の意思に左右されてしまう。企業の中の意思に同じことを目指して、お互いに日本一になりたいと思って協力してやってきたんですが、縛られてしまうところもあるというのが企業スポーツだったのではないかという気がします。〈平尾〉端的に言うならば、メリットは終身雇用で、辞めてからの仕事の心配をしなくていいということに尽きるのではないかと思います。安定的な生計と計画が立てられる。デメリットは国内の大会ではそんなにはないのですが、グローバル化でグローバルな世界になってきた時には強化がおぼつかない。外国とやった時には、もう少し徹底的な強化が必要になってくるといういいことではないかと思いますが。ラグビーにおいては、以前、プロ化という話は出なかったんですが、ワールドカップという言葉が出てきまして国外と戦わないといけないう時に差がある。ここを埋めないといけないうことでそういう問題が発生してきたのではないかと思いますが。

〈横山〉終身雇用をバックにし高度化を担ってきた部分が崩れてきた、と。サッカー等で問題になっています「セカンドキャリア」、やめた時にどうするか。セカンドキャリアと言いますが、実はファーストキャリアが問題で、ファーストキャリアをどうしようかという話になってくる。そこが高度化を目指してプロ化をしようという、ワールドカップを誘致しようという時の、悩ましい問題かなと思います。

〈質問〉日本マスター陸上競技連盟です。ラグビーの教育的効果ということですが、ラグビーの生涯スポーツに果たす役割とかありましたら教えていただきたいのですが。スポーツ文化を

根づかせようとする、子どもたちの教育も大切ですが、中高年者の生涯スポーツにも目を向けていかないと文化とか同意がえられないのではないかと思います、その点について。

〈横山〉一生ラグビーができるかという話ですが。

〈大八木〉ラグビー協会の普及育成委員をしばらくやっていました。その中で提案したのはタグラグビー。腰にマジックテープでタグを両サイドにつけて、ラグビーのボールを使って6、7人の形式で、ラグビーのスピリッツを持ってやるのですが、ぶつかることをしないラグビーをします。男女問わず、年齢を問わず、できるんですね。幼稚園3つ集めて「お父さんを連れてきて」とラグビーの体験をさせたんです。本来、5号級の大人が持つラグビーボールと、年中、年長同士で本来のラグビーをさせる。その世代同士だと怪我は起こらないことがわかりました。「またやりたい」、と。その時に来た親たちにタグラグビーをやらせて、何度も楯円球を持った感覚を身につけてもらう。その後には必ずやるのはタックルダミー。スポンジでボンとぶつかる練習をする。これも不思議に小学校低学年以下は、当たり方を教える前にどんどん当たりについて、なおかつ、お母さん、お父さん方もタックルダミーにあたる。ラグビーの楯円球をもとにしているんなニュースポーツとか、ラグビーの練習1つを持って体験できることで、年齢を問わず、男女を問わず、幅広い生涯スポーツになるのではないかと思います。

〈平尾〉生涯スポーツをもっと柔軟に考えるべきではないかと思います。やることだけがスポーツにかかわるということではないと思います。見ることもかわり方、支えることもかわり方です。70歳になってラグビーをしようとは到底思わない。ただ試合を見にいきたいと思う。適当な運動量は年齢、個人差があって、駅から降りて階段を登って上から見るのが適当な運動量で、ゲームを見て感動してワクワクして帰る。これは一番の適当な運動量だと思います。ラグビーをすることが生涯スポーツということではないような気がします。もっと幅広く、スポーツを大枠でとらえた中で、生涯スポーツの考え方は重要になってくるのではないかと思います。

〈林〉ラグビーはグラウンドの中でやる80分だ

けでなく、その前後、前日の緊張感、スパイクを磨いて紐を換えて、だんだん盛り上げていってグラウンドで戦って、その後また、アフターファンクションがあったりする。全部、一式のものだろうととらえています。1回ラグビーやったら離れられない。遊びに年2回くらいやるんですが、仲間が集まったらまた楽しいしね。飲む方が主力ですが、これがラグビーだという部分は年とってもできるし、つながりを持っていける。

ノーサイドの話で、ニュージーランドに行った時、あるオールドラガーの家に全日本チームが招待されました。お昼を振る舞ってくれたんです。その人が曰く、「長い間、ラグビーをプレーしてきた。勝ったり負けたりしたこともあった。でも長い年月たって勝ち負けはすべて忘れてしまったよ。俺が覚えているのは一緒にラグビーをしたということだけだよ。最後はラグビーが勝ったんだ。だから俺はお前たちを招待して御馳走するんだよ」。これがノーサイドかなという感じがします。

〈質問〉同志社ラグビーファンクラブ事務局です。1つはラグビーワールドカップ招致以前にラグビーの競技人口の減少、子どもが減少している。ラグビー自体が世界的に偏ったスポーツでもある。日本国内でも同じことが言える。強いところは関東、関西、九州北部に偏っている。京都でもそれを支えていたのがラグビースクールだ、と。ラグビースクールを終わって中学校に行くんですが、京都の中学ではいくつかの学校では合同チームしか作れない状況になっています。子どものスポーツがそれまでの野球とか限られたものからサッカーが入ったり、選択肢が増えたことがあります。サッカーのJリーグが地域でスクールをする。企業から切り離れたフランチャイズ制をとった。その結果、スクールが増えて、少子化の子どもの奪い合いの中で、サッカーが全国的にはアドバンテージを持っている。その意味ではラグビーは手段が遅れているのではないか。日本では企業がバランスをとっていると思いますが、トップリーグも企業が支えている限り、地域にはいけない。関東、関西の大都市に偏らざるをえない。企業が背景にあった場合、地域の人間には入りにくいものがあるんです。神戸製鋼は大震災以降、地域と結びついた運動をされています。特にシックス

というクラブを持っておられるので、地域とのかかわり、少年スポーツとのかかわりについてシックスの経験を踏まえて、「地域総合型スポーツクラブ」ということで文部科学省が大学に役割を期待しているわけですが、早稲田が早稲田クラブを作っています。企業が4,000万円くらい、アディダスから寄付をもらって、総予算が8,000万円くらいということですが。

〈横山〉スポーツの地域戦略について。スポーツが地域に向けてどういう戦略を展開しているか。

〈平尾〉シックスの話ですが、お金はあちこちから集めていますが、たいした運営はできていません。企業の支援もないところではできないということで、間口を広くするということが、神戸製鋼の名前を使わず、施設は神戸製鋼を使ってもらって、指導者も神戸製鋼から来てもらってやっています。地域の神戸だけではなく京都からも来てくれたりしています。財政的には難しい問題がありまして、運営していくとなると会員だけのお金ではまず運営できないと思います。そこには支援者を募っていかないと難しいわけです。募るためには企業なら企業のメリットもないといけな。今、集めているのはメリットも求めてない方ばかりなので珍しいケースだと思います。企業の宣伝が必要だったりするケースがあるんですけど、あまり企業にこだわらず、支援してくれる方々を受け入れながら、やる側にとって効果の上がるもの、やる側にとって楽しみになっていくものを作っていく必要があると思います。今まで企業に偏りすぎていたということは無きにしも非ずということで、そこはうまくこれから地域とコンセンサスを取りながら、いい形を作っていくべきかなと思います。

〈大八木〉データ的には日本にはラグビー人口は133,000人ほどいるんです。ニュージーランドも同じくらい。人口比率から言うと日本の方が低いわけです。もう1つ注目したいのはクラブ数です。日本は4,000ちょっと。ニュージーランドは600チーム。そして同じ人数がいる。どうやねん、と。ニュージーランドはクライスタチャーチの1つのクラブにトップA、B、アンダー11がいて、シニア、子どもたちという展開をしています。日本のカウントする単位はラグビースクールもある、中学もある。高校、大学、社会

人、クラブチームありという単位の数え方をすれば、同じラグビーの大切さを知っている利害関係者、ステークホルダーがそれとうまくリンクしていけば、公立中学に社会人の選手が教えにいくとか、うまくリンクさせていくことが1つの課題ではないかと思うわけです。欧米のようにクラブソサエティーと教育と、会社の福利厚生で進んできた日本の歴史観の違いが、スポーツの振興がある面では妨げているのかなと思うわけです。

〈林〉できる範囲のことをやろうかというのが僕のスタンスで。今度は大学生を集めようかと電話をするんですよ。学生と話を。「こんなことをやりたいけど、どうやる」と何チームか集まってやるわけです。そうやってつながりが増えていく。大学生だと終わった後、一杯いこうか、と。大八木淳史のタグラグビーとか。ボールを持ったことがない子どもに安全なやり方でラグビーを始める、身体を動かす。やってみたら最初はいやいややっても、身体を動かしたり、一緒にやることは楽しいと思うんです。今まで離れていた個と個が一緒にやる中で、そこでやっていくことによって「お前も入ったら？」という社会性ができてくるのではないかな。お祭もそういう要素がある。広がってやって考えていけば、どうかかなと思います。

〈横山〉直接的な関係を、いかに結んでいくか。真山先生に文部科学省の「総合型地域スポーツクラブ」など、スポーツの地域振興計画との関連でご説明していただけますか。

〈真山〉「総合型地域スポーツクラブ」という発想が出てきたのは、文部科学省としても学校だけの枠で考えていたのでは、ある程度物事がじり貧状態になってしまうので、学校教育から広げて、昔からの社会教育とは違った切り口で考えた時、「地域」と「スポーツ」を合体させることによって、1つの新しい展開があるのだという取り組みだと思います。それはそれでいいんですけど、ものを動かすにはお金の問題が出てきて文部科学省の補助金ということで、お金の流れが縦割的になってしまう。末端の地域でいろんな取り組みをしても、お金というところで文部科学省のつながりになってしまう。お金が切れた時、身動きがとれなくなるということが起こりがちなので、地域はもっとしたたかにならないとけないでしょうし、スポー

ツをやっている人も、したたかにアイデアを出して横の広がりを考えていく必要があるのかな、と。そういう時に企業も含めて、NPOとかがやっているような個人単位の寄付も含めて可能性を探らないといけないのかなと思います。〈横山〉地域振興という国の政策ですが、文部科学省がやっているスポーツ振興基本計画の「総合型地域スポーツクラブ」も、今年、5年目の見直しの時期を迎えています。興味があればホームページに紹介されています。モデル事業となって助成金がついている時は大変成功したんですが、助成金を引き上げられた時、どうなるかということは大変な問題で、成功している事例は数少ないということです。文部科学省も全国的に中学校区に1つ、作ろうとやっていたんですが、今、「体力」ということが前に出てきました。子どもの体力づくりを振興計画の基本にしようということですが。そういう政策も、ご指摘のあったように、お金の問題でうまくいかないところがあるかと思っています。

それでは質問はこれまでとさせていただきます。皆さんからまとめを簡単にいただきまして、終了としたいと思います。真山先生からお願いします。

〈真山〉今日のシンポジウム、ラグビーのまさにトップアスリートという人たちからお話をいただきました。大学院でスポーツを1つのアカデミックな研究対象として研究しているという努力をしておりますが、実際にスポーツをやっていた人、現にやっている人、スポーツにかかわっている人、そういう人たちと情報交換しながらでないと研究は成り立たないわけです。平尾さん、大八木さんは大学院に来て自らも研究にかかわっていただいたわけですが、こういう交流をどんどん進めていくことによって、スポーツに対する熱い思いと、アカデミックな研究対象として緻密に検討・検証した結果をうまく結びつけていくと、日本のスポーツ、スポーツ文化が発展するのかな、と。今日は、その1つのきっかけになればと思っております。そういう意味では成功なのではないかと思っています。

〈大八木〉今日、聴講していただいた方は同志社の大ファンの方だと思うわけです。まとめは真山先生からきっちりしていただきましたの

で、同志社大学ラグビー部に対する思いでまとめにしたいと思います。立命館に1コマ授業に行きましたら守衛に止められたんです。そろそろ僕ら3人、「H2O」も顔と名前を忘れられております（笑い）。本音でございます。行って驚きました。立命館すごいグラウンドですよ、芝生の。すごいところであって、監督、コーチがウエン・シェルドーと申しまして、我々の時代のオールブラックスのキャプテンで世界一になった奴が指導しています。それでも勝てません。なんやろ。伝統とか、思いとか、ファンの熱い心があることを、今の現役選手がどう感じるかということをもとめとしまして、我がH2Oも応援したいと思いますので、皆さんも同志社大学ラグビー部をよろしくお願い申し上げます。バトンを熱き林先輩に回します。きっと京田辺に届いていると思いますので、気持ちは。〈林〉大八木さんの話を聞いて、いらんことを思い出しましたね。この間、寮まで技術指導委員会に行きまして、帰りに試合をやっているというので久しぶりに後輩を覗いていこうと思いましたが門で止められましてね。「車を入れるな。外に駐車場があるから外においてこい」、と。後で約束もあって、後ろ髪引かれる思いで帰ったんですよ、時間がなくて。

〈大八木〉ちょっと睨みつけたんじゃないですか（笑い）。

〈林〉これは固いなと、制度もあると思います。OBとしては神戸から2時間かかるんですけど、寂しいなと思って帰ったことを思い出しました。それはさておき。こういう場があったのはラグビーのおかげかな、と。裏腹みたいな話ですけど。人生の中で一杯出会いがありまして、ラグビーのおかげで人に出会って、それで今、ここに集まることも含めて、大事な、大事な思い出でね。こういう出会いを大事にしていきたいな、と。私自身もやれることを精一杯やっていきたいなと思っています。どうもありがとうございました。

〈平尾〉同志社に対する応援は大八木さんが言わったので。「体力」という話が文部科学省の方で注目されている、と。「知力と体力は別のものでない」と思っています。一緒なんだと思います。陰山英男先生、「百マス計算」の先生ですが、シンポジウムで「今の子どもたちは最近、学力が落ちたというけど、どうなんで

すか？」と聞いたら、「違うんです。知力ではなく体力がない。考えるには体力がいる」と。この話を聞いて、なるほどと思いました。金出武夫さんというカナディアン大学のロボット工学の先生、日本人ですが、「研究者で一番大事な何か？」と質問したら「体力だ」とおっしゃったんです。「考えるには体力がいるんだ」と。作家の村上春樹さんは聞くところによると、12時まで仕事して、後、めちゃくちゃ走らはるんです、毎日。なぜか。「体力がいる」、と。体力がないと考えられない。これは重要なところで、最近、知的レベルが落ちたというけど、違うんです。体力が落ちたのではないかというのが重要な問題ではないかと思います。スポーツはそこが重要なところがありますので、知力

と体力と別個にして考えていますけど、実はそうじゃない。実は一緒になっているんだということのを改めて認識していただきたいなと思います。

〈横山〉ありがとうございました。Jリーグの川口さんがうまいキャッチコピーを作られて、「日本にスポーツが定着するのには100年かかる」ということで「100年構想」とおっしゃっています。それだけ長い時間がかかるものだという事で、森さんの言葉で言うと、皆さん、一人ひとり熱い思いがありますので、「もっとスポーツに税金を使っていんだ」という声を上げていただければ、我々の思いも伝わるかと思います。本日は長時間、どうもありがとうございました。以上で閉会といたします。